

はか
博 多 126

—— 博多遺跡群第161次調査報告 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1038集

2009

福岡市教育委員会

はか
博 多 126

—— 博多遺跡群第161次調査報告 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1038集



調査番号 0572

遺跡略号 HKT-161

2009

福岡市教育委員会

序

J R 博多駅から博多湾を望む一帯は、二千年余の昔から大陸文化の窓口として栄えたところであり、中世には貿易都市「博多」として繁栄を極めた所です。

この博多の町も、近年さらに都市部の再開発が進み、200次におよぶ発掘調査が実施されています。これらの調査で出土する大量の輸入陶磁器は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿とさせるものがあります。

今回報告する第161次調査では、東西に延びる中世の道路遺構が発見されました。周辺の調査でも、この道路に繋がる道路やそれと直交する道路あるいは並行して延びる道路遺構が報告されています。これによって道路を中心に整然と区画された街区の形成と在り様が明らかになり、太閤町割以前の町並みの発展を知る上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、考古学や地域史の研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会が財団法人福岡アジア交流会館の共同住宅建設に先立って、2006(平成18)年3月17日～7月8日までに福岡市博多区店屋町22番1～10、23番1～6で発掘調査した博多遺跡群第161次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、井戸跡をSE、土壤をSK、溝遺構をSD、道路遺構をSF、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通して001からナンバーを付した。なお、一部で検出した第2面の遺構には201からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した挿図は遺構を小林義彦が、また遺物は小林と今村ひろ子が作成したが、木製品は境恵子・横溝舞が実測した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の製作図は、小林と今村が作成した。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は小林が行った。なお、3号井戸跡等から出土した動物遺体については山崎純男氏(前文化財部長)に、また青銅器やガラス玉の科学的分析については比佐陽一郎(福岡市文化財整備課)氏に依頼し、付論として掲載した。また、銅鏡の保存処理とX線撮影は片多雅樹(福岡市埋蔵文化財センター)が行った。
8. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
I.はじめに	1
発掘調査にいたるまで	1
発掘調査の組織	1
立地と歴史的環境	2
II. 調査の記録	4
調査の概要	4
基本的層序	5
第1面の調査	5
1) 井戸跡	7
2) 土 壤	8
3) 鋼治炉	15
4) 道路遺構	20
5) 包含層出土の遺物	23
III. おわりに	24
付論 博多 161次調査区出土の自然遺物と骨角器 山崎純男	25
博多遺跡群 161次調査で出土したガラス資料と 156次調査出土の権について 比佐陽一郎（福岡市文化財整備課）	33

挿図

- Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/50,000) 2
Fig. 2 博多遺跡群第161次調査区位置図 (1/6,000) 3
Fig. 3 第161次調査区位置図 (1/1,000) ... 4
Fig. 4 第161次調査区周辺現況図 (1/500) ... 4
Fig. 5 遺構配置図 (1/150)..... 5
Fig. 6 1・3・4号井戸跡実測図 (1/50) ... 7
Fig. 7 3・4号井戸跡出土遺物実測図 (1/4) 8
Fig. 8 5・6・12・13号土壤実測図 (1/30) 9
Fig. 9 38号土壤実測図 (1/40) 10
Fig. 10 38号土壤出土遺物実測図 (1/4・1/8) 11
Fig. 11 39・77・80・81・86・102・105・107号土塗実測図 (1/30) 12
Fig. 12 39・74・81・86・102・105・107号土壤出土遺物実測図 (1/4) 14
Fig. 13 2号鋳冶炉実測図 (1/20) 15
Fig. 14 2号鋳冶炉出土遺物実測図 (1/4) 15
Fig. 15 76号道路遺構実測図 (1/60) 16
Fig. 16 76号道路遺構東西土層断面実測図 (1/60) 16
Fig. 17 76号道路遺構出土遺物実測図 (1/4) 17
Fig. 18 8・10号溝出土遺物実測図 (1/4) 20
Fig. 19 9・11号溝出土遺物実測図 (1/4) 20
Fig. 20 9号溝護岸材実測図 (1/16) 21
Fig. 21 レンチ出土遺物実測図 (1/4) ... 21
Fig. 22 I層出土遺物実測図 (1/4)..... 22
Fig. 23 包含層出土遺物実測図 (1/4).... 22

- 写真目次
- ph. 1 調査区南側全景 (北より)..... 6
ph. 2 調査区北側全景 (北より)..... 6
ph. 3 1号井戸跡全景 (北より) 8
ph. 4 3号井戸跡井側全景 (東より) 8
ph. 5 3号井戸跡井側桶痕 (東より) 8
ph. 6 4号井戸跡全景 (南東より) 8
ph. 7 38号土壤全景 (東より) 13
ph. 8 38号土壤遺物出土状況 (南より) 13
ph. 9 39号土壤全景 (東より) 13
ph. 10 77号土壤全景 (東より) 13
ph. 11 102号土壤全景 (北より) 13
ph. 12 107号土壤全景 (南より) 13
ph. 13 105号土壤全景 (南より) 13
ph. 14 105号土壤漆器皿出土状況 (西より) 13
ph. 15 土壤出土遺物 (縮尺不同)..... 14
ph. 16 2号鋳冶炉全景 (北より) 15
ph. 17 76号道路遺構南側全景 (北より) 18
ph. 18 76号道路遺構北側全景 (南より) 18
ph. 19 76号道路遺構土層断面 (南東より) 19
ph. 20 76号道路遺構遺物出土状況 (北より) 19
ph. 21 8・9号溝遺物出土状況 (南より) 19
ph. 22 9号溝遺物出土状況 (東より) 19
ph. 23 9号溝中央部西壁護岸 (南より) ... 19
ph. 24 9号溝北端西壁護岸断面 (東より) 19
ph. 25 10号溝中央部護岸横断面 (南より) 19
ph. 26 10号溝中央部漆器碗出土状況 (東より) 19
ph. 27 出土銅錢 (縮尺不同)..... 23

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

中世に貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の窓口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なったさまざまな遺構や遺物が眠っている。この博多の町も、都市空間の有効利用を図った高層ビル化が進み、その波は路地に面した旧市街地にも及んでいる。博多遺跡群を構成する海に面した息濱と陸側の博多濱に挟まれ、東西から潟が湧入していた呉服町から店屋町でも高層のオフィスビルや共同住宅が盛んに建設されている。

こうした中、博多区店屋町 22 番 1 ~ 10、23 番 1 ~ 6 地内で財団法人福岡アジア交流会館による集合住宅の建設が計画され、当該地内における埋蔵文化財の有無についての照会が 2005（平成 17）年 3 月 3 日に提出された。この地は、かつてマンションの建設計画があり、既に試掘調査が実施されていたが、既存建物の厚いコンクリート床が打設されていたために遺構面は未確認状態であった。そのため正確な遺構の拡がりを確認するために同年 6 月 16 日に再度試掘調査を実施した。その結果、現地表下 290cm で遺物包含層を確認したが、その下層は重機のパケットが達せず遺構の詳細は未確認のままであった。そのために発掘調査は、300cm 以下の遺構面を確認しながら進めていく試掘と本調査の同時並行的な調査体制で進めた。

発掘調査は、3 月 17 日に埋立土の鋤き取り作業からはじめ、GL 下 310cm、標高 2.3m で遺構面を検出した。調査区は、土砂崩落防止のため鋼矢板が建築に先立って打設され、その鋼矢板は地中梁と支持鋼で補強されていたため、排土作業や調査の進捗に際しては支障を来す場面も生じた。また、排土は調査区内に仮置きして反転する 2 分割の調査になった。この排土は、ロッテ建設の協力によって一度場外に搬出したが、その後は調査の終了した南側の調査区へ人力で移動した。一方、発掘調査では、第 40 次調査区や第 95 次調査区の道路遺構と一体をなす側溝を伴った道路遺構を検出し、鹿角製品や下駄、漆器などの木製品が出土した。この様な貴重な成果を得て、7 月 8 日に無事終了した。

2. 発掘調査の組織

調査委託 財団法人福岡アジア交流会館 理事長 姜泰守

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第 1 課

文化財部長 矢野三津夫 山崎純男（前任）

埋蔵文化財第 1 課長 山口謙治

埋蔵文化財第 1 課調査係長 米倉秀紀 山崎龍雄（前任）

調査庶務 文化財管理課 榎本芳治 古賀とも子 鈴木由喜（前任）

調査担当 埋蔵文化財第 1 課 小林義彦

調査・整理作業 石橋陽子 今村ひろ子 江頭瑞恵 大瀬良清子 古賀順子 小島君子

坂本ハツ子 田中トミ子 為房紋子 塚本よし子 土斐崎孝子 西田文子 野田淳一

馬場イツ子 播磨博子 福田操 松尾千寿 松下さゆり 三栗野明美 持丸玲子

森田祐子 矢川みどり 山口慶子 吉川貴久 萬スミヨ

発掘調査では、ロッテ建設株式会社の及川英二氏をはじめ多くの方々ご協力とご配慮をいただいた。また、山崎純男、山口謙治、池崎謙二、比佐陽一郎、田上勇一郎氏には指導と助言を受けた。協力に感謝を申し上げるとともに本報告に十分に生かせなかつた力量不足を深くお詫びする次第である。

3. 立地と歴史的環境

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、御笠川と那珂川の二筋の流れが河口を接して博多湾に注いでいる。博多遺跡群は、この二つの河川に挟まれた博多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画されている。

この博多湾に面した東西 400 m、南北 1,000 m の古砂丘上に占地する博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連続とづく大複合遺跡である。殊に、古代には中国や朝鮮半島からの陶磁器類の輸入窓口として、また中世には泉州埠と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の発掘調査は、1977（昭和 52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に始まり、これまで 200 地点に及ぶ発掘調査が行われ、二千年余に及ぶ歴史の全貌が次第に明らかになりつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代前期後半に遡る。はじめに祇園町交差点を中心とする古砂丘上に住居跡群や甕棺墓群が営まれる。ここは博多遺跡群を作る二つの古砂丘の陸側の「博多濱」の中央部で、古砂丘の最高所にあたり、中期から後期には後背地に向かって拡大していく。

次の古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北の上呉服町周辺まで拡がっていくが、遺跡の中心は未だ「博多濱」の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓などが営まれる。一方、古砂丘東側の第 28 次調査では、墳丘長が 56 m を超える 5 世紀初頭に造営された前方後円墳の「博多 1 号墳」、第 109 次調査では「博多 2 号墳」が確認されている。これらの前方後円墳は、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼として位置づけられ、相応の勢力をもった首長層の存在が推考される。

更に、「那の津」の官衙が設置された 536（宣化 1）年以降、古代になると博多遺跡群は对外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は「博多濱」全域に亘って拡がっていく。688（朱雀 3）年に初見する「筑紫館」、842（承和 9）年以降に現れる「大宰府鴻臚館」は、博多遺跡群から入り海ひとつを隔てた丘陵上に位置している。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式や老司式の瓦、皇朝十二銭、円面硯、石帶、綠釉や灰釉陶器のほか越州窯系青磁、長沙窯系陶器などの多種多量の輸入陶磁器が出土し、官衙的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。一方、909（延喜 9）年の遣唐使の廃止は、私貿易の隆盛を促すこととなり、古代末からは対宋貿易の中心地となる。発掘調査で検出される遺構や遺物の多くは、11 世紀後半から 13 世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11 世紀後半には「博多濱」北限の潟が砂州状に

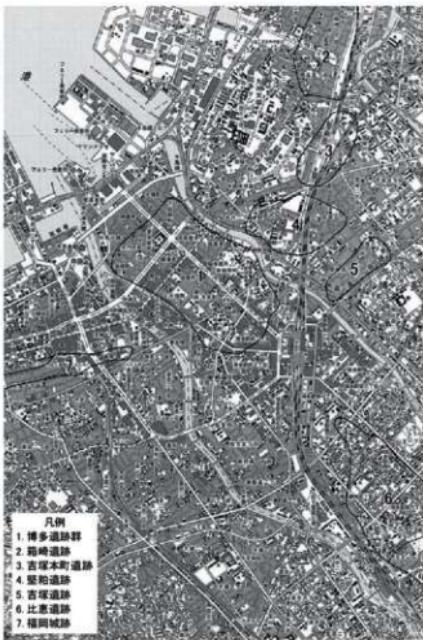


Fig.1 博多遺跡群位置図 (1 / 50,000)

埋め立てられ、呉服町交差点付近で北の「息濱」と繋がる。

鎌倉時代には、「息濱」の開発が進み、「博多濱」と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代を通して供用されるが相互間の規則性や統一性は有していない。しかしながら、これらが中世後半期における都市「博多」の町並みの概観を示している。一方で、「元寇の役」の後には鎮西探題府が置かれ、对外貿易都市としての機能のみならず西国への政治的中心地としての側面も備えてくる。

室町時代には、「息濱」が一層の発展を遂げ、博多の都市機能の中心は「博多濱」から「息濱」へ移る。交易商たちは、朝鮮半島や中国大陆のみならず、遠く東南アジアにまで進出する。このことはベトナムやタイの陶磁器の出土によって裏付けられる。また、博多にも和寇の記録があり、海賊である和寇によって民間貿易が担われていた側面も窺える。一方、政治的には足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕の勢力が強く、その政治力や軍事力は強大なものとはなり得なかった。15世紀末の応仁の乱以降、博多は对外貿易の隆盛によって莫大な富を産み出し、その領有を巡って大内氏や大伴氏の争いが繰り返され、度々戦禍に見舞われた。その荒廃は、薩摩島津氏による焼き打ちまで続いたが、豊臣秀吉による九州制圧によって終息し、嶋井宗室などの博多商人による太閤町割りによつて復興し、黒田氏の入府を経て今日に至る。

第161次調査区のある店屋町は、博多遺跡群を形成する二つの古砂丘「博多濱」と「息濱」の間に東西から湾入する湯の汀線上にあたる。この湾入部は、11世紀代には湿地となり、12世紀初めには埋め立てられた陸橋によって二つの古砂丘は繋がり、博多の活動域が次第に「息濱」に移っていくが、埋立地は陸橋の周辺域を大きく越えることはなく、16世紀末まで湾入部には湿地帯が残っていた。

第161次調査区は、陸橋部周辺域の埋め立てによって形成された新開地で、14世紀初めには「博多濱」北端の市街地に組み込まれた地域である。この市街化に伴って町割りを区画する道路が縦横に整備され、次第に街としての景観を整していく。この道路群は、本調査区を初め、東の第35次調査区や北の第40・95次調査区でも検出されている。

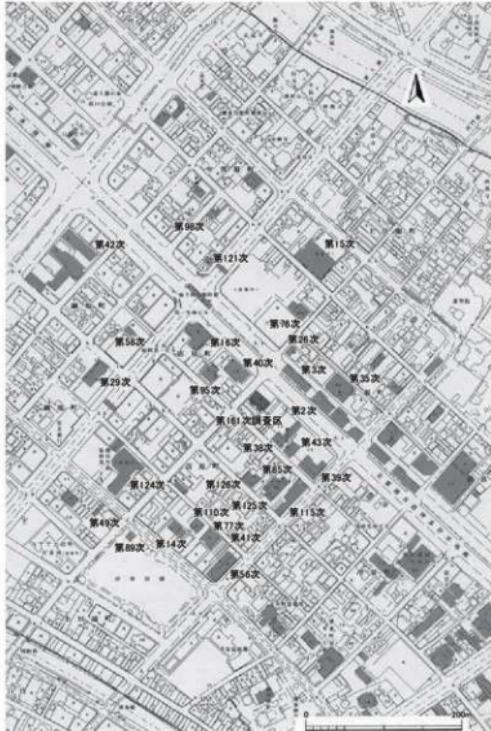


Fig.2 博多遺跡群第161次調査区位置図 (1 / 6,000)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

博多遺跡群は、博多湾に面して南北に並ぶ「博多濱」と「息濱」のふたつの古砂丘からなり、この二つの古砂丘は東西から湾入する入り江によって隔てられている。第161次調査区は、陸側の古砂丘「博多濱」の北端に位置し、東から湾入する入り江にむかって緩やかに傾斜を始める汀線上に立地している。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの一大複合遺跡で、黄白色砂層の基盤層までの間には1~5mにも及ぶ遺物包含層が厚く堆積している。この遺物包含層には幾面もの遺構面が重層的に刻まれているが、堆積土壤の変化を明確に捉えられないことが多い。また、整地層や焼土層が検出されても面的な拡がりとして捉えられないのが一般的である。このため発掘調査では、明確に遺構を把握できる安定した面まで意図的に掘り下げて遺構面を検出し、更にその包含層を掘り下げて下層の遺構面を検出す手法を選択した。

第161次調査区は、GL-290cmまでが60cmの土間コンクリート層を含む客土層のためGL-300cmまでを無条件に鋤き取り、標高2.4mで安定した整地層を検出した。この整地層には南北に延びる4条の溝のほかに土壤や井戸跡が掘り込まれており、この面を第1面の遺構面とした。なかでも溝は道路の両側に付設された側溝で、溝内の排土は幾度も道路上に盛り上げられて補修されていた。この第1面の遺構面下の20cm下にも、道路遺構の開削期と考えられる溝などが掘り込まれた整地層があり、第2面の遺構面としたが全体的な拡がりは明確にできなかった。第1面は、概ね中世後半の遺構面であるが、井戸跡など近世の遺構も含まれている。本来的には、第1層の上面に近世の整地層があったものが現代の開発によって削平されたことに因るものであろう。

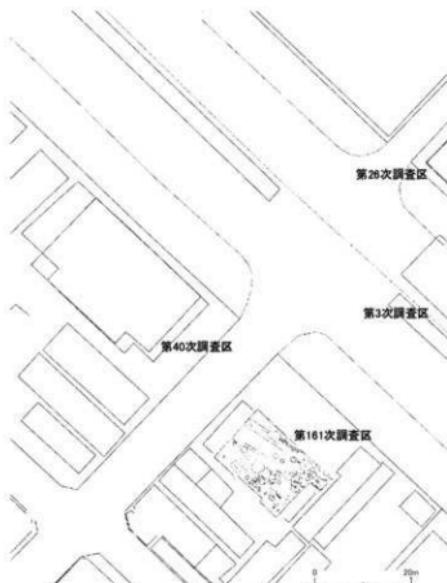


Fig.3 第161次調査区位置図 (1 / 1,000)



Fig.4 第161次調査区周辺現況図 (1 / 500)

また、調査は排土を場内に仮置きするために調査区を東西に2分割し、はじめに東側の150 m²を調査した。この間、発掘調査で生じた排土は一度は場外に搬出したが、東側の調査終了時はショベル車のバケットが届かず、この排土を人力で東側に移して西側の100 m²を調査した。

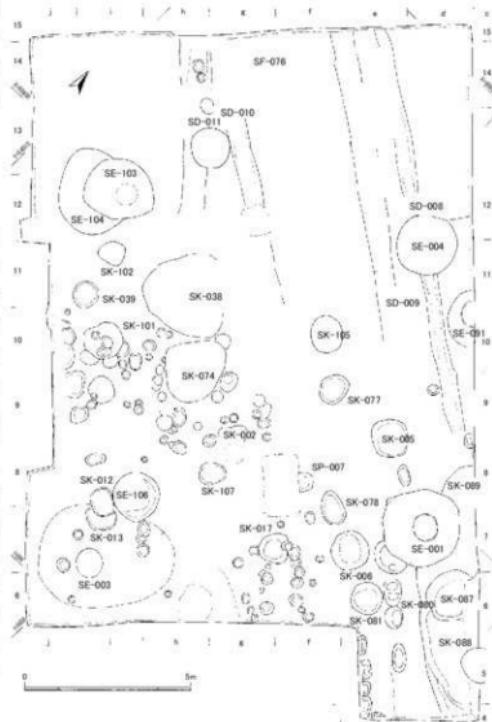
2. 基本的層序

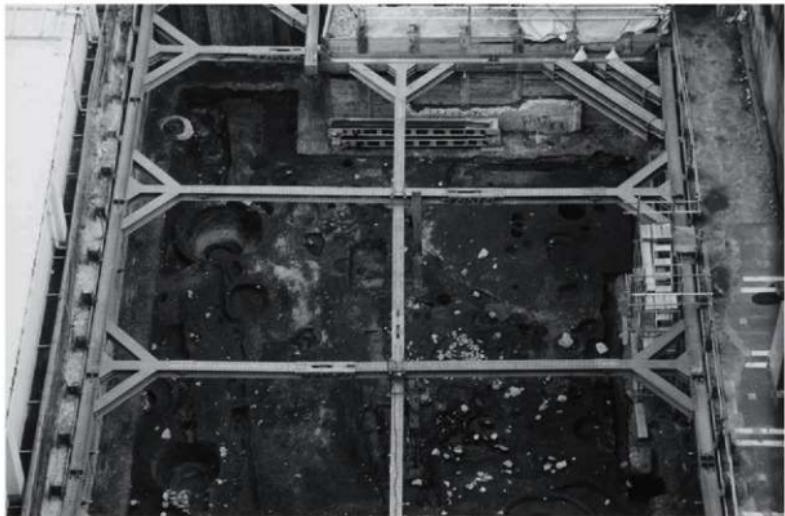
第161次調査区は、博多遺跡群を形成する陸側の古砂丘「博多濱」北端の砂丘が東から湾入する入り江にむかって緩やかに傾斜を始める汀線上に立地している。この入り江は、古代末に埋め立てによる陸化が始まり、12世紀には神の「息濱」と陸続きになっていく。そのため古砂丘上で観られる風成砂である淡黄色砂層の基盤層ではなく、粗砂層上には腐植物層や泥炭状の粘質土層上に陸側からの埋め立て土が互層をなしている。

第161次調査区のボーリング調査では、現GL-250cmまでは土間コンクリートや礫片を含んだ埋め立て土で、その下層は-400cmまでが細～粗砂を主体とする暗褐色のシルト質砂、-480cmまでが細砂層、-680cmまでが粗砂層、-880cmまでが細砂層で、その下は粘土質細砂やシルト質砂、粘土質砂が互層をなし、更に礫混じりの粗砂や粘土質砂礁が-2500cmまで続いていると報告されている。周辺の調査結果を勘案すると、この砂質土を主体とするシルト質土や礫層などは洪積層であり、深度約30mほどで砂質頁岩からなる古第三紀層の基盤層となっていることが一般的である。

3. 第1面の調査

第1面は、GL-300cmの標高2.2～2.4mで検出した埋め立て整地層上の遺構面で、中世後半の遺構が主体を占めるが近世の遺構も混在している。このうち近世の遺構は井戸跡や鍛冶炉で、本来的には第1面上の上層から掘り込まれたものが、現代の建物によって第1面まで削平されたことに起因する。中世後半の遺構には井戸跡や土壙のほかに道路遺構がある。この道路遺構は、両端に側溝を伴うもので、側溝は横に架けた板材を杭で固定して安定を図っていた。また、この道路遺構の西側には建物の礎石と考えられる扁平な円礫が多くあり、道筋に沿つた町屋の存在が想起される。





ph.1 調査区南側全景（北より）



ph.2 調査区北側全景（北より）

1) 井戸跡 (SE)

井戸跡はすべてで 10 基を検出した。構造的には、井側に桶を埋置した 2 基 (SE - 003・004) のほかは平瓦を巻き上げて井側とした近世期のもので、モルタル土管を埋置したものまである。このうち井側に平瓦を巻き上げた井戸跡は、開削期の時期や立地的な制約から土砂崩落を回避するために精査を割愛したものがある。

1 号井戸跡 SE - 001 (Fig. 6 p h. 3)

調査区の東南隅 d・e - 7・8 区に位置する瓦巻きの井戸である。平面形は直径が 230cm のやや不整な円形プランをなし、掘り方の中央部に厚さが 3cm の平瓦を 10 枚円形に巻いて井側としている。この井側は検出面より - 105cm の深さから下が遺存していたが、井側内や覆土中には破碎した瓦が出土しており、廃棄時に 5 ~ 6 段以上の井側が破壊されたと考えられる。壁面の崩落が生じ完掘を断念した。青磁碗や瓦器片が出土した。

3 号井戸跡 SE - 003 (Fig. 6・7 p h. 4・5)

調査区の南西隅に位置する井戸で、掘り方の北壁は 12 号土壤や 13 号土壤、106 号井戸に切られている。掘り方は長辺が 415cm、短辺が 320cm の大きな楕円形プランを呈し、その南寄りに井側を埋置している。井側は直径が 80cm ほどの桶を重ねている。桶側は検出面より 5cm と 35cm、70cm の 3ヶ所で幅が 3cm のタガ痕を検出した。この 3 段目のタガ痕から 3 ~ 5cm の所で幅が約 10cm の縦に並べた板材を検出し、45cm の深さまで掘り下げたが、更に 100cm 以上の深さまで達する可能性が想起されたために完掘を断念した。また、桶側の土壤中から貝殻や魚骨片が検出された。そこで検出面より - 90cm の井側内を便宜的に上中下層に分層してサンプリングし、種子や魚骨などの採集を図った。採集した資料は、付論 1 「博多第 161 回調査区出土の自然遺物と骨角器 (山崎純男)」に詳述されており参照されたい。

1 ~ 4 は土師器小皿。口径は 1 ~ 3 が 6.6 ~ 7cm、4 が 1 ~ 4 は土師器小皿。口径は 1 ~ 3 が 6.6 ~ 7cm、4 が

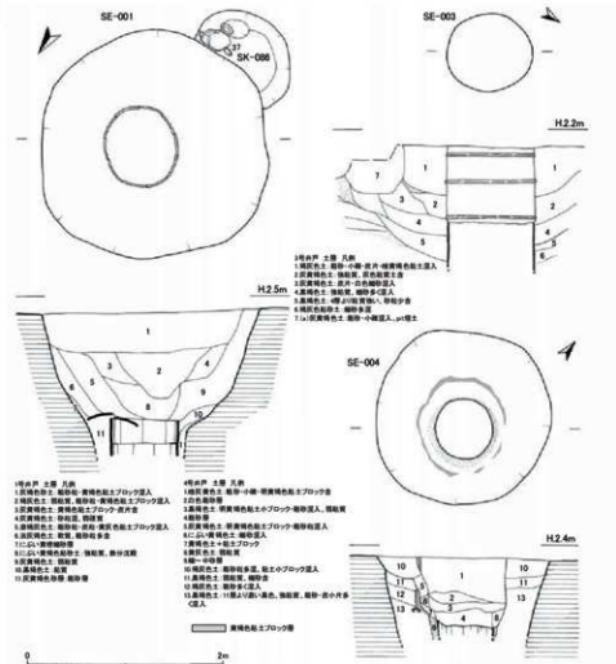
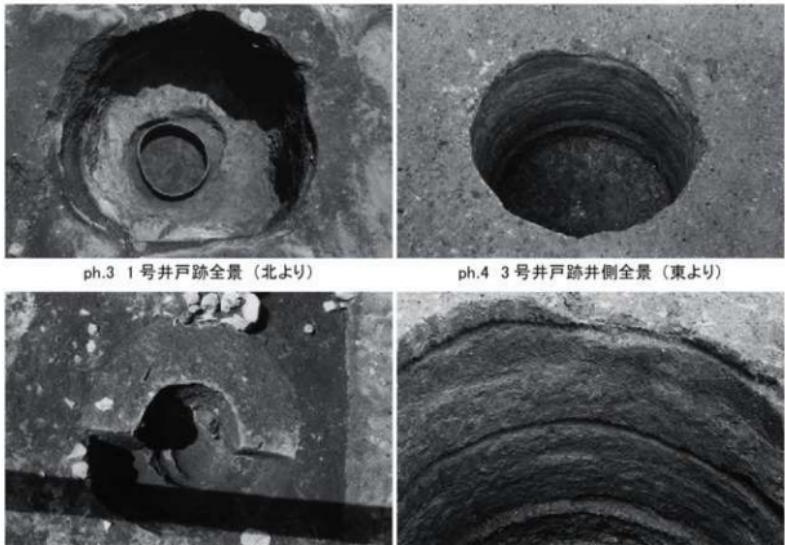


Fig.6 1・3・4号井戸跡実測図 (1 / 50)



ph.3 1号井戸跡全景（北より）

ph.4 3号井戸跡井側全景（東より）

ph.6 4号井戸跡全景（南東より）

ph.5 3号井戸跡井側桶痕（東より）

8cm。底部は回転糸切り。2と4には油煙痕があり、灯明皿への転用品である。5は口径が12.4cm、器高が2.1cmの土師器壺。底部は回転糸切り。206は笄の頭片。

4号井戸跡 SE-004 (Fig. 6・7・27 p.h. 6)

調査区北東隅のd-11・12区に位置し、76号道路の東側側溝SD-08を切っている。掘り方は直径が180cmの円形プランを呈し、検出面より-60cmの深さで薄い板材痕を検出した。板材痕は厚さが4~7mmと薄い上に遺存状況が悪いが、縦方向に板目痕があり桶側の可能性が考えられる。この桶側の外側には2~10cmの厚さで細~中砂粒が裏込状に充填されている。さらに、検出面では井側を取り巻くようにブロック状の黄褐色粘土が巻かれていた。壁面崩落の危険性が生じたために完掘できなかった。遺物には須恵器壺や土師器高杯のほかガラス玉片や銅錢が出土している。

6は青磁の木瓜型変形小皿。口径は5.8cm、高台径は2.8cm、器高は2cm。164・165は銅錢。164は判読不能。165は1368年初鑄の明錢「洪武通寶」である。

2) 土 壤 (SK)

土壤は15基を検出した。プラン的には円~楕円形と方形プランのものがあるが、円~楕円形プランのものが多い。このうち特筆されるものは38号土壤で、壙中から磁器や木製品に混じって種子や動物遺体が検出された。分布的には道路遺構の西側にやや密に拡がる傾向が見られるが、その機能については判然とし難い。

5号土壤 SK-005 (Fig. 8)

調査区の東部e-8・9区にある小型の土壤で、すぐ南には1号

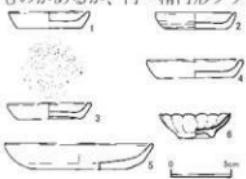


Fig.7 3・4号井戸跡出土遺物

実測図 (1/4)

井戸跡がある。平面形は長辺が 112cm、短辺が 105cm の隅丸方形プランを呈する。壁高は 15cm で、東～南壁は急峻に、北～西壁はやや緩やかに立ち上がる。壙底は浅い回レンズ状をなし、断面形は逆台形をなす。遺物は土師器杯や小皿のほか青磁碗、青磁皿、陶器鉢、瓦質甕などが出土した。

6号土壤 SK-006 (Fig. 8)

調査区東南部の e - 7 区にある土壤で、平面形は一边が 115cm のやや不整な円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は 15 ~ 20cm。回レンズ状をなす壙底は、東壁側が深くなる。覆土中から須恵器杯や蓋、甕のほか土師器甕や小皿、青磁や白磁の碗と白磁皿、陶器甕、鉢、瓦質甕片などが出土した。

12号土壤 SK-012 (Fig. 8)

調査区南部の i - 8 区に位置する小土壤で、東小口壁は 13 号土壤を切り、北側壁は一部を 106 号井戸に切られている。平面形は長辺が 96cm、短辺が 68cm の隅丸長方形プランを呈する。深さが 11cm の壁面は急峻で断面形は箱形をなす。遺物は青磁碗や白磁碗のほか土師器小皿、瓦質甕、鉢片が出土。

13号土壤 SK-013 (Fig. 8)

調査区南部の i - 7 区に位置する小型の土壤で、北壁は 12 号土壤に切られている。平面形は一边が 80 ~ 85cm の隅丸方形プランをなす。壁面はやや急峻で箱形の断面形をなし、深さは 15cm を測る。遺物は青磁碗や白磁碗のほか土師器小皿、須恵器片、陶器片と土製丸が出土した。

38号土壤 SK-038 (Fig. 9・10 ph. 7・8・15・27)

調査区西部の h - 11 区にあり、すぐ南には不整形な 74 号土壤が、西には 76 号道路遺構の西侧溝 11 号溝が位置している。平面形は検出面で、長辺が 262cm、短辺が 247cm の三角形状の不整な円形プランを呈するが、上層の遺物を取り除くと下層には長辺が 180cm、短辺が 140cm を測る楕円形プランの一回り小さい 2 次土壤がある。プランの異なる両者が一体のものか否かは判然としなかったが、ここでは一遺構として取り扱った。遺物的には、腐植物を含む上層が土師皿のほかに下駄や板草履、桶底材、櫛などの木製品が多く出土したのに対して下層は土師器杯や皿、白磁碗が多い。また、検出面上には 15 ~ 25cm 大の扁

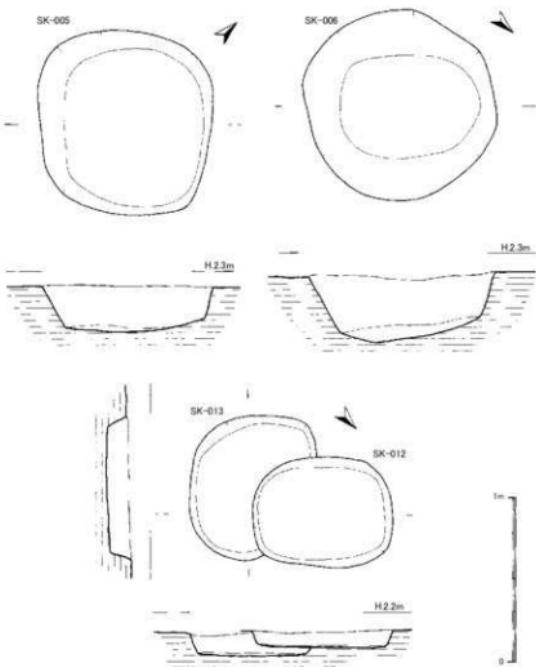


Fig.8 5・6・12・13号土壤実測図 (1 / 30)

平石を置いた Pit があり、建物跡の礎石と考えられる。

7・8は土師器小皿。口径は7.5~7.8cm。9~12は土師器壺。口径は、9が12.5cm、10~12が13.9~14.4cm。底部は9・10が平底で9は糸切り後に板目。11・12には油煙痕がある。13は口径が15.9cm、器高が5.7cmの瓦器壺。14は口径が15.4cm、器高が6.3cmの白磁碗。15は底径が31cmの磁灶窯系鉄絵褐釉盤。底面に墨書がある。16・17は細いSタイプの土鍤。長さは3.6~4cm、厚さは1cm。18は厚さが2cmの筒状をしたMタイプの土鍤。19は滑石製の有溝石鍤。20は口径が26.6cmの滑石製石鍋。長さが7.9cm、幅が3cmの縦長の把手が口縁部下に付いている。21・22は差歛下駄。21は長さが17.9cm、幅が8.2cmで横緒孔は中央にむかって斜めに穿つ。柾目取。22は上面から2本1対の楔を打ち込んで後歛を止めている。柾目取。23・24は下駄の歛。25は板目取の板草履。26は柾目の折敷。上面に刃物痕があり、俎板への転用品か。幅は22.3cm、厚さは3mm。166~168は銅錢。166は1009年初鑄の「祥符通寶」、167は1094年初鑄の「紹聖元寶」で北宋錢。

3号土壙 SK-039 (Fig. 11 p.h. 9・15)

調査区の西端i-11区に位置する小土壙で、すぐ北東には38号土壙がある。平面形は直径が80cmの円形プランをなし、深さが20cmの壁面は緩やかに立ち上がる。壙底は南から北へむかって緩やかに傾斜し、断面形は逆台形を呈する。覆土中から土師器壺や白磁碗が出土した。

27は口径が15cm、器高が2.9cmの土師器壺。底部は回転糸切りで、油煙痕がある。28は高台径が7.1cmの半袖の白磁碗。IV類。29は口径が17.2cm、高台径が6.8cm、器高が5.6cmの内黒瓦器壺。外面は横研磨、内面は縦横に粗い研磨仕上げ。11世紀末~12世紀前半。

7号土壙 SK-074

(Fig. 5・12 p.h. 15)

調査区西南部のh-10区に位置し、すぐ北西には38号土壙がある。平面形は長辺が210cm、短辺が180cmの不整な円形を呈する。覆土には腐植土の堆積層があり、青・白磁壺や壺のほか綠釉壺、石鍋片、土師器壺、小皿が出土した。

30・31は陶器四耳壺で逆L字状の口縁部内には目砂が付着。31は孔径が10cm、器高が21.3cm。体部は茶オリーブ釉、高台内は鉄釉を袖掛け。31は口径が10cmで灰オリーブ釉。32は型押整形の青磁合子。口径は6.4cm、器高は2cm。33は型押しの鋳型。34は土鍤。

7号土壙 SK-077

(Fig. 11 p.h. 10)

調査区中央部の東寄りf-9区に位置する小土壙で、105号土壙のすぐ南

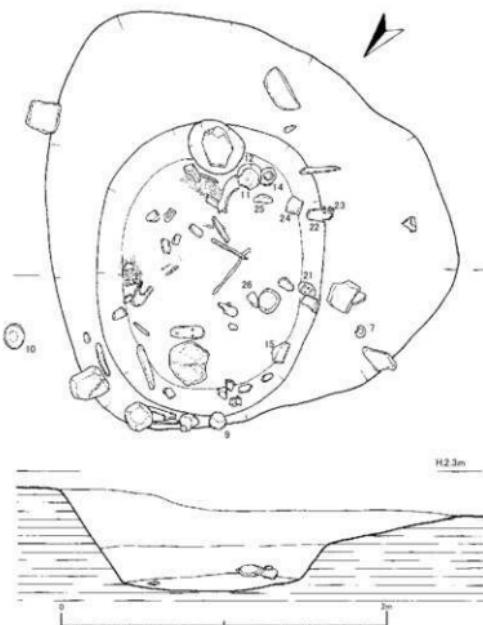


Fig.9 38号土壙実測図 (1/40)

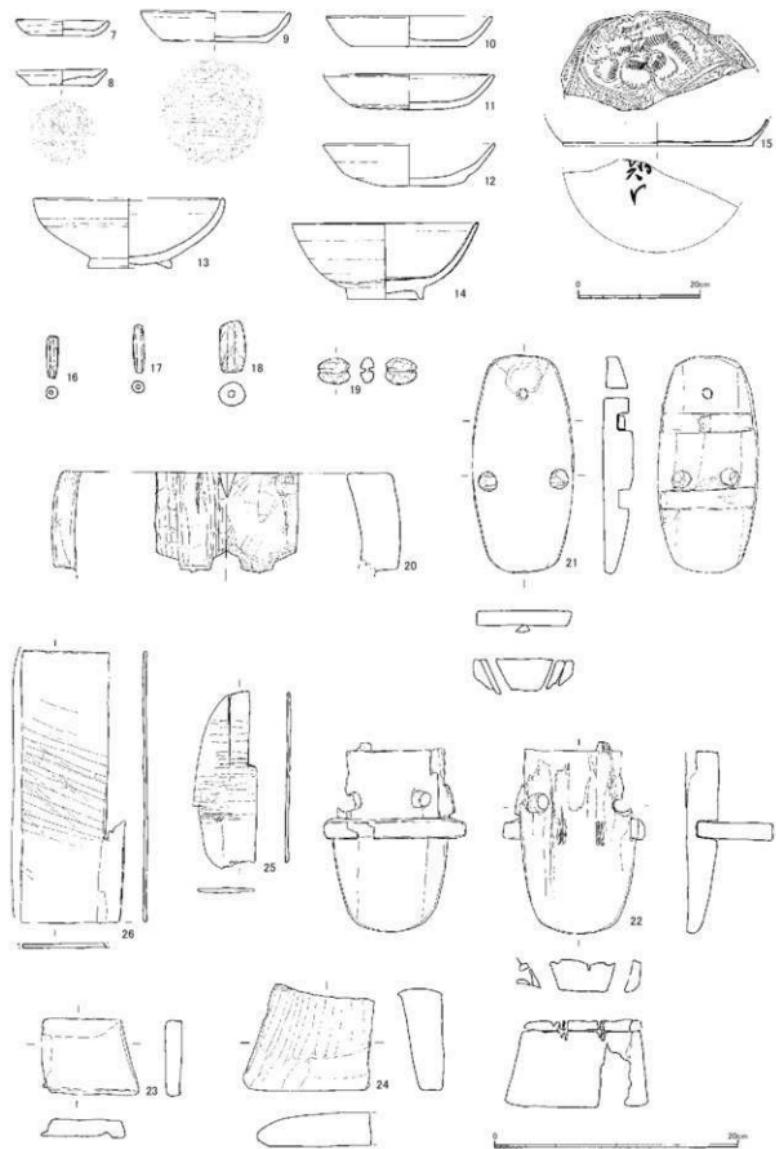


Fig.10 38号土壤出土遺物実測図 (1 / 4 · 1 / 8)

東に位置している。平面形は直径が80～90cmのやや不整な円形プランを呈し、深さが20～25cmの壁面は緩やかに立ち上がる。フラットな壙底は南から北へむかって緩やかに傾斜する。覆土はやや粘質の暗灰色砂土で、白磁碗や土師器小皿、瓦質甕、鉢片のほかに板材や桶底片が出土した。

78号土壤 SK-078 (Fig. 11)

調査区東部のf-8区に位置する小土壤で、すぐ東には6号土壤がある。平面形は長辺が105cm、短辺が70cmの卵形状の楕円形プランをなしている。壁高は20cmで壙底が浅く凹レンズ状に窪んだ逆台形の断面形をなしている。東壁に沿って拳大の礫石が並んで出土した。青・白磁塊等が出土。

80号土壤 SK-080 (Fig. 11)

調査区南東隅のe-6区に位置し、すぐ西には81号土壤、北には86号土壤が隣接している。平面形は長辺が85cm、短辺が52cmの楕円形プランをなす。緩やかに立ち上がる壁面は、東小口側に半月形の平坦面を作りて浅い凹レンズ状の壙底に至る2段掘りの構造をなしている。壙底までの深さは

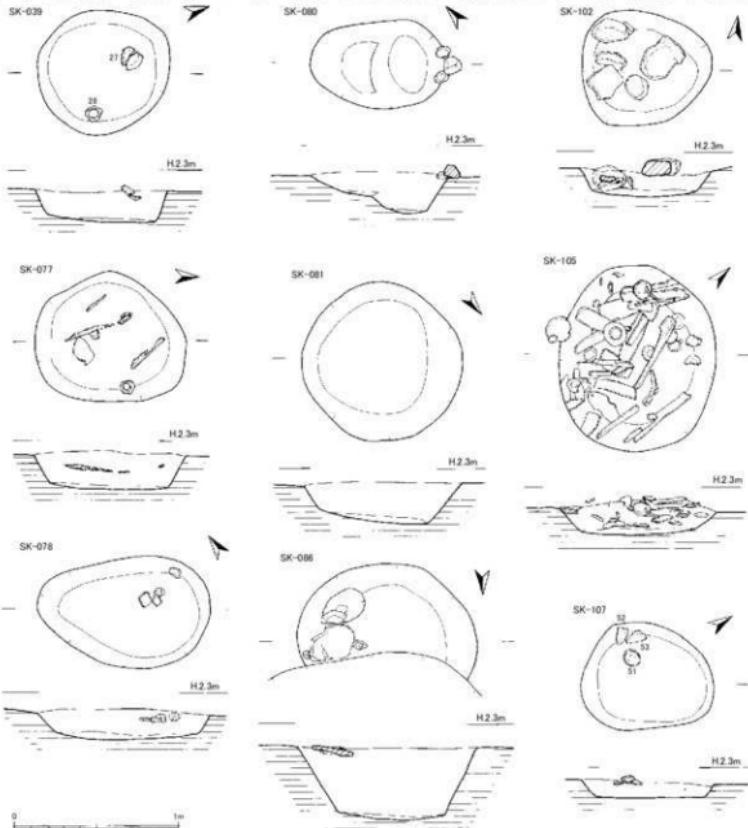


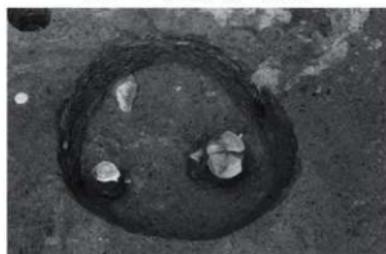
Fig.11 39・77・78・80・81・86・102・105・107号土壤実測図 (1 / 30)



ph.7 38号土壤全景（東より）



ph.8 38号土壤遺物出土状況（南より）



ph.9 39号土壤全景（東より）



ph.10 77号土壤全景（東より）



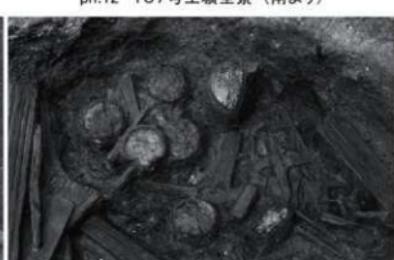
ph.11 102号土壤全景（北より）



ph.12 107号土壤全景（南より）



ph.13 105号土壤全景（南より）



ph.14 105号土壤漆器皿出土状況（西より）

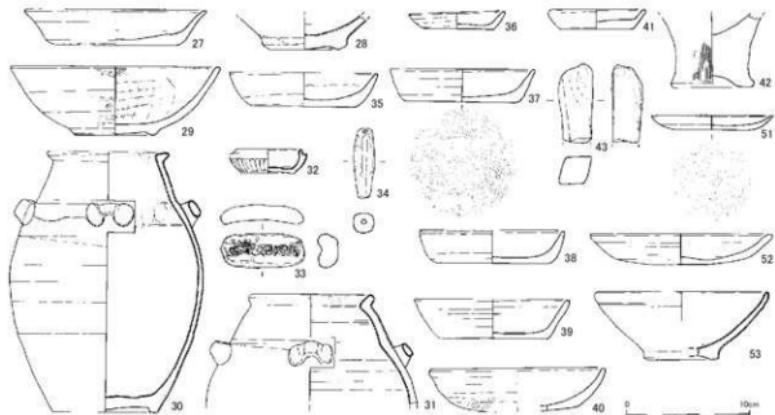


Fig. 12 39・74・81・86・102・105・107号土壤出土遺物実測図（1／4）

25cmを測る。青磁や白磁の塊、皿のほか須恵器壺蓋、土師器小皿、瓦器塊などが出土した。

8 1号土壤 SK-081

(Fig. 11・12 p.h. 15)

調査区南東隅e-6区に位置する小土壤で、すぐ北には106号土壤がある。平面形は直径が97～100cmの円形プランをなし、深さが15～25cmの壁面は緩やかに立ち上がる。壙底は南から北へむかって回レンズ状に緩やかに傾斜する。

35は口径が12.3cm、器高が2.8cmの土師器壺。内面には油煙が付着。底部は回転糸切り。

8 6号土壤 SK-086

(Fig. 11・12 p.h. 15)

調査区の南東隅e-7区に位置し、北壁は1号井戸によって削平されている。平面形は長辺が110cmで短辺が90cmほどの楕円形プランをなそう。緩やかに立ち上がる壁面は、深さが45cmで断面形は逆台形を呈し、壙底は浅い回レンズ状をなしている。



ph.15 土壤出土遺物（縮尺不同）

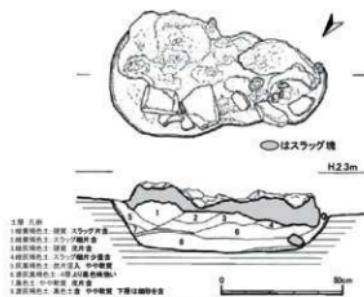
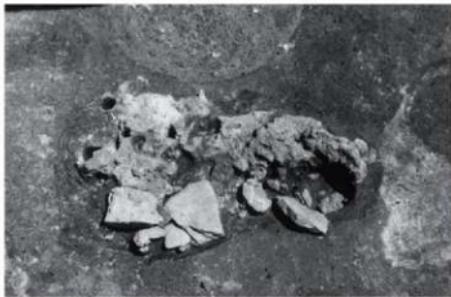


fig.13 2号鍛冶炉塞測図 (1 / 20)



ph-16 2号鍛冶炉全量（北より）

36は口径が8cmの土師器小皿。37～40は土師器壺。口径は37・38が12cm、39は13cmで底部は回転糸切り。40は口径が14.6cm。体部は内湾気味に立ち上がり、底部は丸底状。

192号土壤 SK-192 (Fig. 11 p.h. 11)

調査区西部の i - 11 区にある小土壤で、南には 39 号土壤がある。平面形は長辺が 80cm、短辺が 70cm の不整な円形プランを呈す。高さが 18cm の壁面は緩やかで壌底は浅い凹レンズ状を呈し、断面形は逆台形をなす。覆土は弱粘質の濃灰黑色土。上面に拳～人頭大の扁平な転石があり、建物跡の基礎石の可能性がある。

195号土塘 SK=105 (Fig. 11·12 n.h. 13~15)

調査区中央の f - 10 区に位置し、76 号道路遺構上に掘り込まれている。平
面形は長辺が 113cm、短辺が 95cm の楕円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は
20cm、墳底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は緩やかな逆台形。遺物は青・白磁碗のほか縁袖や楕円
陶器壺、土師器壺、小皿、須恵器甕片に混じって下駄歯や曲げ物板と 10 点余の漆器小皿が出土し、
青磁碗には墨書きがある。

41は口径が7.8cmの土師器小皿。底部は糸切り後に板目圧痕。42は弥生中期の甕で、底径は6.8cm。43は砥石。44は曲げ物の底板。45は折敷板。46は差下駄の歯。47・48は漆器小皿で、黒漆地に赤漆で花文を描く。49は桶の底板。50は円孔があり、曲げ物の蓋か。171は「元符通鑑」。

1.0.7号土壤 SK=107 (Fig. 11 p.h. 12)

調査区南部のg-8区に位置する小型の土壙で、すぐ西には106号井戸がある。平面形は長辺が81cm、短辺が65cmの楕円形プランを呈する。深さが10cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壙底は平坦である。遺物は白磁碗のほか須恵器や土師器片が出上した。

51は口径が6.1cmの土師器小皿。52は口径が15cm、器高が2.5cmの土師器杯でやや丸底気味の膨らむ底部はへラ切り。53は玉縁口縁の白磁碗で、口径は14.4cm、径が6cmの高台は無釉。

3) 鍛冶炉 (SH)

2号鍛冶炉 S.H = 002 (Fig. 11·13 p.h. 16)

調査区中央部のg-9区にある鍛冶炉で、107号土壠の北に位置する。平面形は長辺が89cm、短辺

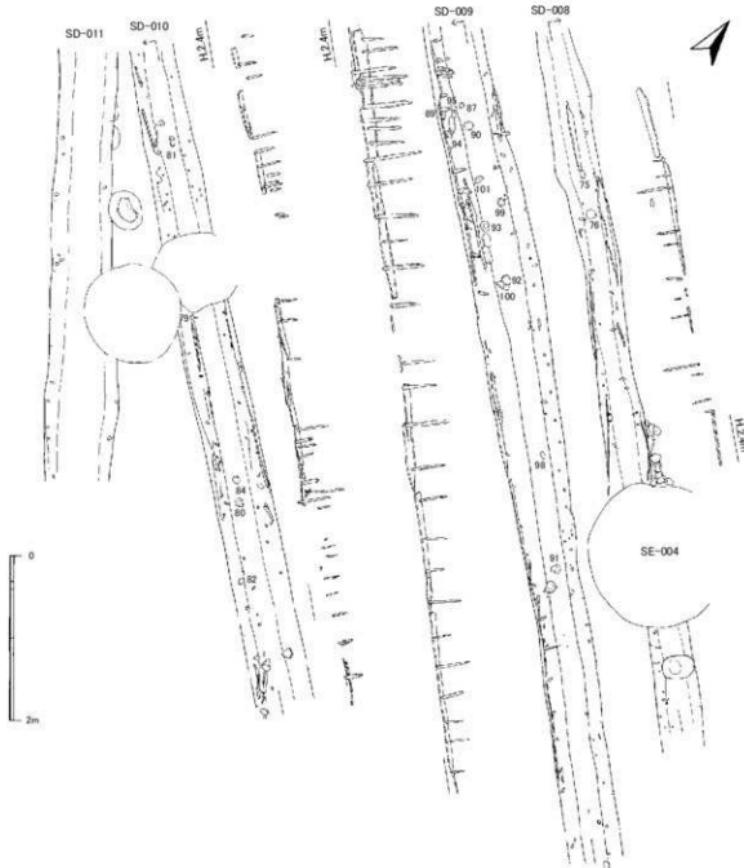


fig.15 76号道路遺構実測図 (1/60)



fig.16 76号道路構造東西土層断面実測図 (1 / 60)

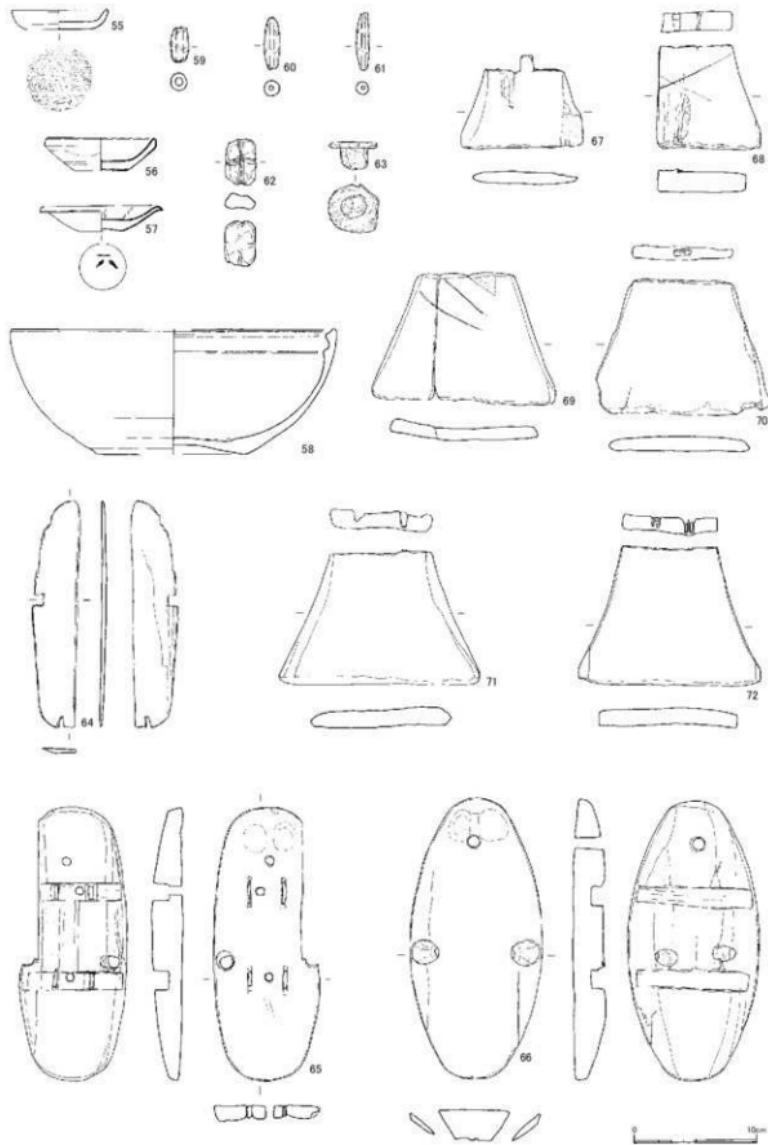
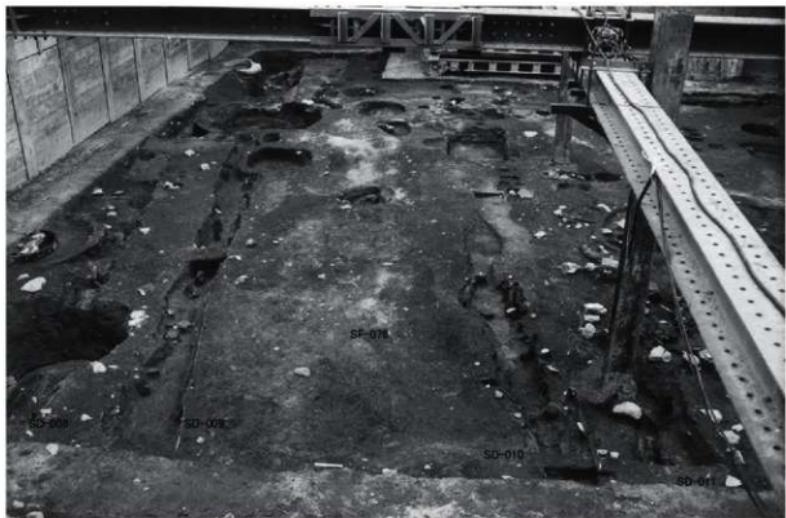


Fig.17 76号道路構造出土遺物実測図 (1 / 4)



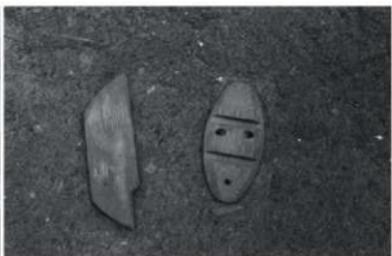
ph.17 76号道路遺構南側全景（北より）



ph.18 76号道路遺構北側全景（南より）



ph.19 76号道路遺構土層断面（南東より）



ph.20 76号道路遺構遺物出土状況（北より）



ph.21 8・9号溝遺物出土状況（南より）



ph.22 9号溝遺物出土状況（東より）



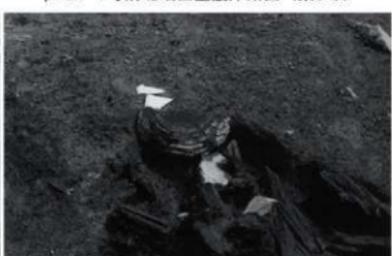
ph.23 9号溝中央部西壁護岸（南より）



ph.24 9号溝北端西壁護岸断面（東より）



ph.25 10号溝中央部護岸横断面（南より）



ph.26 10号溝中央部漆器椀出土状況（東より）

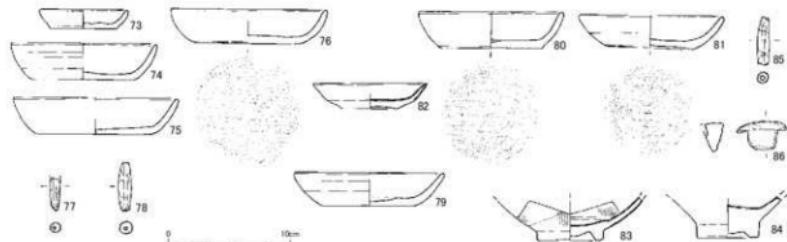


Fig.18 8・10号溝出土遺物実測図 (1/4)

が35～50cmの不整な瓢型をなす。高さが20cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。上縁のスラッグ層下には炭片とスラッグ細片が充満し、輪の羽口片が融着していた。

54は輪の羽口の先端部で、直径が2.2cmの孔にはスラッグが融着している。

4) 道路遺構 (SF)

調査区の中央から北側で側溝を伴う2条の道路遺構を検出した。しかし、この2条は全く異なる道路遺構ではなく、側溝の改修に伴う道路本体の移動とも云うべきものであるためひとつの遺構として取り扱った。また、第2面でもこの側溝下で道路に伴う側溝の一部が確認された。このことから街割の基本となる道路の開削と整地改修が繰り返し行われたことが窺われる。

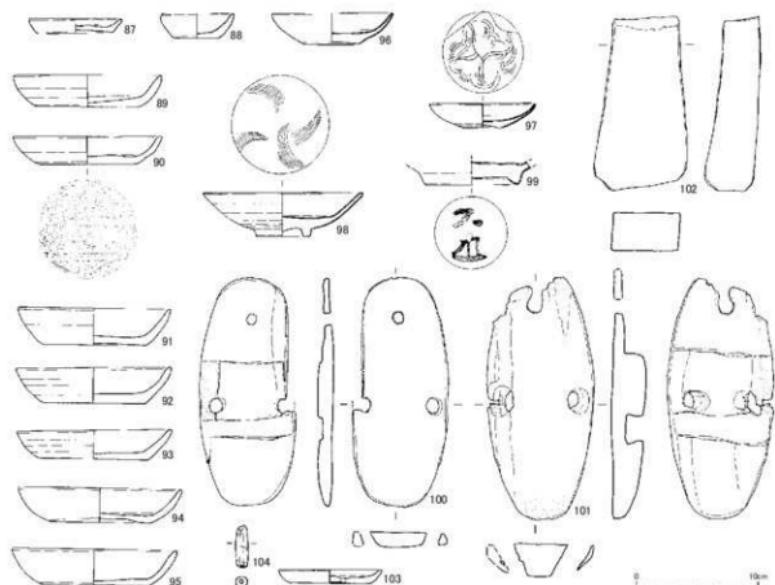


Fig.19 9・11号溝出土遺物実測図 (1/4)

7 6 号道路遺構 SF
- 076 (Fig. 15 ~ 17
ph. 17 ~ 20)

調査区の中央から北半部で東西方向に並んで延びる4条の溝遺構 (SD = 008 ~ 011) を検出した。この溝は、北から8号溝と9号溝が並行し、4.0 ~ 4.5m の間隔を置いて10号溝と11号溝が並行して延びている。溝に挟

まれた空間は、溝の堆積土を挿き上げて硬化した整地層で、層中には溝の堆積土の下駄や箸、鹿角製品や銅錢が混入していた。この硬化した整地層が道路面で、南北の溝は道路を画す側溝である。側溝は内陸側が高く、海側へ向かう西が低い。溝底の標高は、東が2.0 ~ 2.05m、西が1.9 ~ 1.95mで海側へ緩やかに傾斜する。構造的には幅が45 ~ 55cm、深さが25 ~ 35cmで断面

形は緩やかなU字形をなす。壁面は建築板材などを横に連ねて並べ、15 ~ 35cmほどの間隔で打ち込んだ杭で護岸している。この道路に伴う溝は、8号溝が磁北から50°、10号溝が50.5°西へ、9号溝が48°、11号溝が42°西へ偏って延びていることから8号溝と10号溝、9号溝と11号溝が一対で道路の側溝となり、ひとつの道路遺構を構成している。このうち道路の北側に並ぶ8号溝と9号溝では、9号溝上に8号溝の挿き上げられた堆積土が硬化して整地されており、はじめに9号溝と11号溝を伴った道路が開削され、改修に際して60 ~ 70cmほど北へ拡張して移動している。幅員は、開削時の道路が4m、改修後が4.5mである。覆土は最下層が灰黒色の粘質土、その上層が薄い砂層を挟んで灰褐色～濃褐色砂土が互層をなし、下駄や箸などの木製品のほか磁器や土師器に混じて獸骨などが出土した。

道路上の遺物 (Fig. 17 ph. 27)

55は口径8cm、器高が1.6cmの土師器小皿。56は口径が9.2cmの玉縁口縁の白磁碗。半露胎で釉薬は灰青色。口唇部には油煙が付着。57は口径が10cmの白磁碗。II類-2。見込みに1本の圓線と6本の白堆線を描く。灰白色の胎土にペーブルの釉掛け。釉剥ぎの底部には「一八」の墨書がある。58は無釉の中国陶器鉢。口径は26.6cm、器高は10.3cm。59 ~ 61はSタイプの土鍤。62は石鍋片再利用の有溝石鍤。結節溝は十字形。63は石鍋片再利用の模造鏡。64は長さが18.5cmの板草履。65・66は柵目の差歎下駄。65は長さが22.4cm、厚さは2.5cm。歯留めに2個一対の楔を打ち込んでいる。前緒

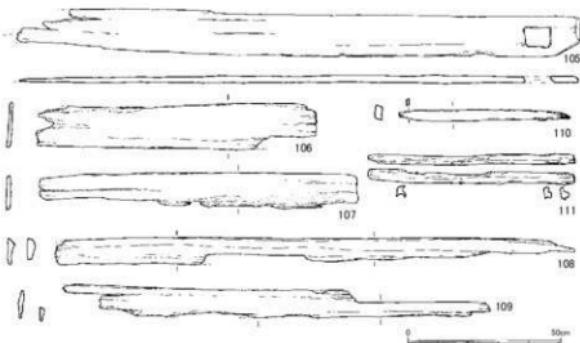


Fig. 20 9号溝護岸材実測図 (1 / 16)

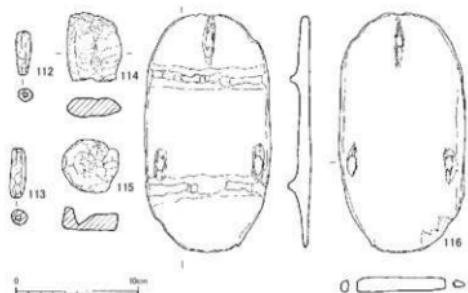


Fig. 21 トレンチ出土遺物実測図 (1 / 4)

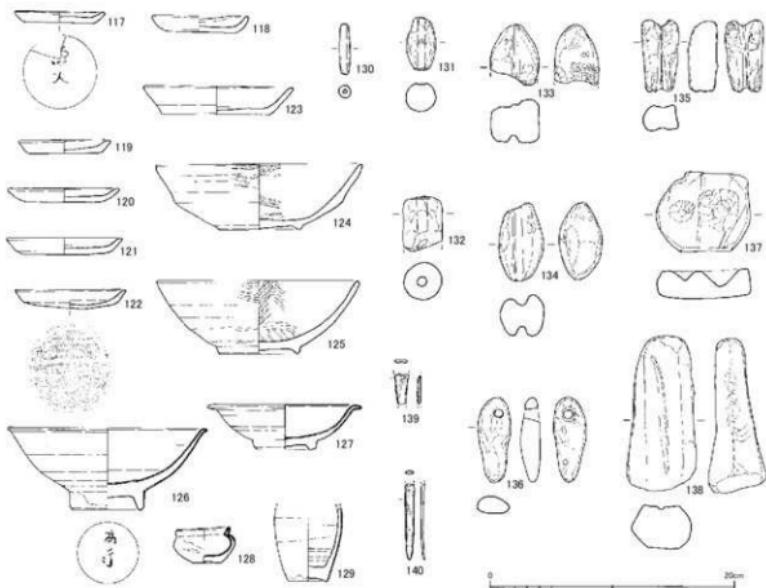


Fig.22 I層出土遺物実測図 (1 / 4)

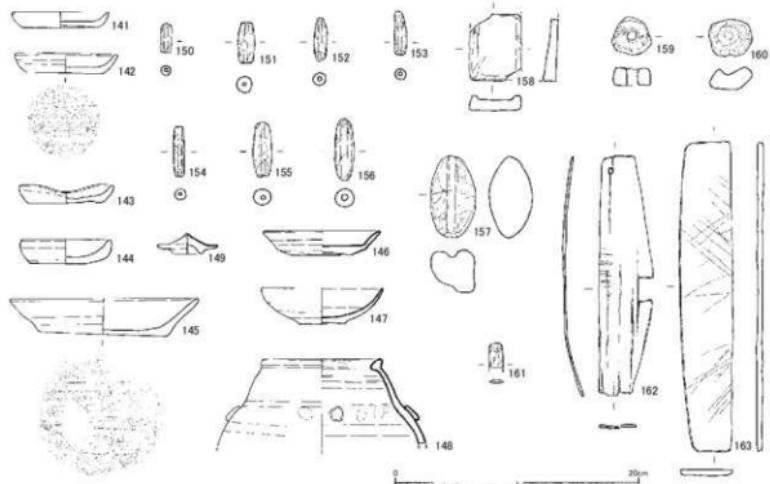


Fig.23 包含層出土遺物実測図 (1 / 4)

の足指痕は右が深く、左足用か。66は長さが22.9cm、幅は10.9cm、厚さは2.5cm。横緒孔は中央に傾き、前緒の足指痕は左が深い。67～72は差歎下駄の歯。67は下駄台に差し込む凸基が付く。68・71には一対、72には横緒孔の間に2本組一対の楔痕を後歯に直交して打ち込む。70は歯に平行して楔を打ち込んでいる。171は「元祐通寶」、172～174は「元豐通寶」、175は「咸平元寶」、176は「熙寧元寶」、177は「祥符元寶」。214・215は鹿の中足骨の笄。214は未製品。

8・10号溝出土の遺物 (Fig. 18 ph. 27)

73～78は8号溝出土。73は土師器小皿、74～76は土師器壺。口径は12～13.6cm。74・76は糸切り後に板目圧痕。77・78はSタイプの土錘。209は笄。79～84・180・181は10号溝出土。79～82は口径が12～12.5cmの土師器壺。79は内唇に油煙が付着。80・81は回転糸切り後に板目圧痕。82は口径が9.5cmのVI類の白磁皿。83は同安窯系I類の青磁碗。84は兜巾高台の陶器碗で、釉薬は黄橙色。85は土錘。84は石鍋片の模造鏡。180は「大觀通寶」。181は「聖宋元寶」。212は笄片。

9・11号溝出土の遺物 (Fig. 19・20 ph. 27)

87～102は9号溝出土。87・88は土師器小皿。底部は回転糸切り。89～95は土師器壺。口径は89が12.2cmで、95が13.6cm。回転糸切り底で、90には板目圧痕が残る。96は龍泉窯の青磁皿で、釉剥ぎの底部には墨書がある。97は口径8.8cm、器高が2cmの青白磁皿。釉剥ぎの底部には目砂が付着。98は同安窯系の青磁皿で疊付には目砂が付着。99は白磁碗。全体に氷裂が入り、底部には墨書がある。100・101は柾目の差歎下駄の台。100は長さが18.9cm、厚さは1.3cm。101は幅が8.8cm、厚さは2.8cm。横緒孔は中央にむかって斜めに穿つ。102は砥石。105～109は建築廃材を転用した溝の護岸材。105は幅が13.6cmの板材で、先端には6.7cm×8.5cmの臍穴がある。210は鯨骨製品。211は鹿角製の把手。103・104は11号溝出土。103は口径8.6cmの土師器小皿。底部に3mmの円孔がある。104は長さが3.4cmの土錘。

5) 包含層出土の遺物

(Fig. 21～23 ph. 27)



ph.27 出土銅錢（縮尺不同）

井戸跡や土壙、溝のほかにピットがあり、その覆土中からも遺物が出土した。ピットの中には扁平な円窓を敷いたものがあり、建物跡の存在が想起されるがひとつの遺構としてはまとまらなかった。整地層やトレンチから陶磁器や土製品、石製品などが出でている。

トレンチ出土の遺物

(Fig 1, 21 ph. 27)

113は1トレンチ出土の長さが4cmのSタイプの土錘。112・114～116は2トレンチから出土。112は土錘。114は石鍋片の有溝石錘。116は墨壺の未製品。116は長さが19.7cm、の連歯の下駄。板目材で横縫孔は垂直に穿つ。

第I層出土の遺物 (Fig 1, 22 ph. 27)

117～122は土師器小皿。117と122は回転糸切り後に板目圧痕。117は墨書きがある。123は口径が12.3cmの土師器壺。底部は前引き糸切り。124・125は瓦器椀。内外面とも粗いヘラ磨き。126はVI～2類の白磁碗。高台内に「高汀」の墨書きがある。127は高台付の白磁皿で口径は12.8cm。嘴状の口縁部は小さく外傾し、縮縫状の見巾高台。128は口径が4.5cm、器高が3cmの陶器小壺。オリーブ釉の半釉掛け。129は灰緑釉陶器の小型瓶。130～132は土錘。131は最大幅部に竹管の刺突文を刻む。133・134は小判状の有溝土錘。135は石鍋片再利用の有溝石錘。長さは5.9cm、幅は3cm。136は6mmの円孔を穿った有孔石錘。137は石鍋片再利用の墨壺未製品。不揃いな逆円錐形の凹みを2個穿つ。138は砥石。139は亀甲製笄。140は漆を塗った骨製笄。221はハート型の透かしが入る鹿角製の刀装具。186は前漢の紀元前118年初鋤の五銖錢。

包含層出土の遺物 (Fig 1, 23 ph. 27)

141～144は土師器小皿。142と144は糸切り後に板目圧痕。145は口径が15.6cmの土師器壺。糸切り後に板目圧痕。146は同安窯II-1類の青磁皿。灰白色の胎土にオリーブ釉を釉掛け。147は口径が10.4cmの白磁皿。見込に1条の圓線を配し、釉は黄味の強いオリーブ色。148は横耳の陶器四耳壺。内傾する口唇部には目砂痕が付着。149は口径が5cm、器高が1.7cmの磁器蓋。150～156は管状の土錘。長さは3.4～5.1cm、幅は0.9～1.6cm。157は小判状の有溝石錘。158は滑石製硯。159は石鍋片再利用の紡錘車で、直径は3.2cm、厚さは1.5cm。160は石鍋片転用の墨壺。161は骨製の笄。162は板目材の板草履。163は折敷板。極目取りで長さが25.5cm、厚さは5mm。

III. おわりに

博多遺跡群を構成する博多濱と息濱のふたつの古砂丘は、東西から湾入する入り海によって画され、第161次調査区は博多濱が内海へむかう汀に位置する。この入り海は12世紀以降埋め立てによる陸地化が進み、街区の形成に伴って幹線道路が造られる。中世後期の博多遺跡群では、博多濱北部に2条の南北道路が復原されている。ひとつは第26・35・62次調査区を結ぶ道路、今ひとつは第38・95次調査区を結ぶ道路である。第161次調査区は、第38・95次調査区の中間点に位置し、検出した76号道路遺構は両調査区の道路遺構と一連の遺構と考えられる。第95次調査区の道路001に伴う西側溝が約40°西へ偏っているのに対して、本調査区の開削期の道路(SD-009・011)は42～48°西へ偏り概ね同じ方位を指している。時期的には14～16世紀代におよぶ同じ年代観が与えられる。この道路は、95次調査区の東で第40次調査区の道路遺構と直交し、第26次調査区から延びる道路へと繋がる。構造的にも、横に並べた板材を内側から杭で固定して護岸したもので共通性が窺える。いま報告されている道路遺構は、博多濱と息濱で若干様相を異にする。道路の開削と街区の形成については、時系列に沿って後日検討を加えたい。なお、自然遺物とガラス玉の分析は付論に詳述している。

博多第 161 次調査区出土の自然遺物と骨角器

山崎純男

博多第 161 次調査区出土の自然遺物には貝類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類・海生哺乳類・昆虫類・植物遺存体がある。以下、それぞれについて述べる。

1. 貝類

貝類は SF - 076 と SE - 003 から比較的まとまって出土している。他に SD - 009・010・包含層から単発的に出土しているが量的には少ない。SF - 076 と SE - 003 の分析にあたって、斧足綱については殻頂部から主歯部分が遺存する固体を対象として左右殻に分類して、数の多い方を個体数として示した。

調査区内から出土した貝類で種が同定できたのは腹足綱がアワビ、クボガイ、ヘソアキクボガイ、クマノコガイ、バテイラ、イシダタミ、キサゴ、サザエ、スガイ、タマキビガイ、オオヘビガイ、ウミニナ、ツメタガイ、アカニシの 14 種、斧足綱がハイガイ、サルボウガイ、イガイ、イタボガキ、マガキ、マジミ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、シオフキガイ、ナミノコガイの 10 種、その他節足動物甲殻綱フジツボ目フジツボ科の 1 種である。

SF - 076 と SE - 003 の出現個体とその構成比は第 1・2 表に示した。

SF - 076 は上層と下層に分けて採集されている。上層では腹足綱がアワビ、ヘソアキクボガイ、サザエ、スガイ、ウミニナ、アカニシの 6 種、28 個体。斧足綱がイガイ、マガキ、ハマグリの 3 種、3 個体がある。下層ではアワビ、クボガイ、ヘソアキクボガイ、クマノコガイ、バテイラ、イシダタミ、スガイ、ウミニナの 8 種、41 個体。斧足綱がイタボガキ、マガキ、ハマグリの 3 種、6 個体がある。上、下層とも腹足綱（巻貝）が 90% 前後を占めている。個体数が少ないと正確な傾向を示しているか明らかでないが、一応傾向を見てみよう。上層では岩礁性貝類は 8 個体、25.81%。内湾砂泥性貝類は 23 個体、74.19% を占め、内湾砂泥性貝類が優先しているのに対し、下層では岩礁性貝類が 30 個体、63.83%、内湾砂泥性貝類は 17 個体、36.17% を占め、岩礁性貝類が優先している。このことは両者の採集場所の違いを示すと共に、投棄の時期の違いを示していると考えられる。

SE - 003 は上層、中層、下層に分けて採集されている。上層では腹足綱がクボガイ、イシダタミ、スガイ、オオヘビガイ、ウミニナの 5 種、13 個体。斧足綱がハイガイ、サルボウガイ、シオフキガイ、ナミノコガイの 4 種、7 個体。中層では腹足綱がイシダタミ、スガイ、タマキビガイ、ウミニナの 4 種、11 個体。斧足綱がサルボウガイ、マガキの 2 種、2 個体。下層では腹足綱がクマノコガイ、イシダタミ、キサゴ、スガイ、ウミニナ、ツメタガイ、キセルガイ類の 7 種、12 個体。斧足綱がサルボウガイ、イガイ、マガキの 3 種、8 個体である。上、中、下層とも腹足綱（巻貝）が 60 ~ 84% と優先しているが、傾向は個体数が少ないと明確でない。SE - 003 出土の貝類の特徴は、貝殻が火を受けていることであり、上層が顕著である。いずれにしても、キセルガイ類を除いた貝類は食糧として遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。また、全体を見たときアワビの量が多いのが一つの特徴であろう。

2. 魚類

魚類は骨の部位が判るものが総数 473 点・その他不明の骨多数が出土している。このうち同定できたのは 365 点で、アオザメ、ネズミザメ科、イタチザメ、エイ類、マグロ、ブリ、マアジ、ヤイトハ

第1表 SR-076 出土貝類構成比表

		上層				下層				全体	
		L(殻)	R(フタ)	個体数	構成比	L(殻)	R(フタ)	個体数	構成比	個体数	構成比
腹足綱	アワビ	1	1	3.23		2	2	4.26	3	3.65	
	ウボガイ					6	6	12.77	6	7.69	
	ヘソアキクボガイ	2	2	6.45		2	2	4.26	4	5.13	
	クマノコガイ					1	1	2.13	1	1.28	
	パテイラ					2	2	4.26	2	2.56	
	イシダタミ					4	4	8.51	4	5.13	
	サザエ	1	1	3.23					1	1.28	
	スガイ	3	3	9.68		13	13	27.66	16	20.51	
	ウミニナ	19	19	61.29		11	11	23.40	30	38.46	
	アカニシ	2	2	6.45					2	2.56	
小計				28	90.31			41	87.25	69	88.45
並足綱	イガイ	1	1	3.23					1	1.28	
	イタボガキ					1	1	2.13	1	1.28	
	マガキ	1	1	3.23		4	4	8.51	5	6.41	
	カガミガイ										
	ハマグリ	1	1	3.23		1	1	2.13	2	2.56	
小計				3	9.69			6	12.77	9	11.53
計				31	100.02			47	100.02	78	99.98

第2表 SE-003 出土貝類構成比表

		上層				中層				下層			
		L(殻)	R(フタ)	個体数	構成比	L(殻)	R(フタ)	個体数	構成比	L(殻)	R(フタ)	個体数	構成比
腹足綱	クマノコガイ									1	1	5.00	
	ウボガイ	6	6	30.00									
	イシダタミ	1	1	5.00		2	2	15.38		1	1	5.00	
	キサゴ									1	1	5.00	
	スガイ	2	2	10.00		2	2	15.38		1	1	5.00	
	タマキビガイ					3	3	23.08					
	オオヘビガイ	1	1	5.00									
	ウミニナ	3	3	15.00		4	4	30.77		6	6	30.00	
	ツメタガイ									1	1	5.00	
	キセルガイ類									1	1	5.00	
小計				13	65.00			11	84.61		12	60.00	
並足綱	ハイガイ	2	1	2									
	サルボウガイ		3	3				1	1	7.69			
	イガイ									2	1	2	10.00
	マガキ					1	1	1	7.69		5	5	25.00
	シオフキガイ	1	1										
	ナミノコガイ	1	1										
	小計			7	35.00			2	15.38		8	40.00	
計				20	100.00			13	99.99		20	100.00	

タ、コショウダイ、ヘダイ、マダイ、カワハギ、フグ類、カサゴ科、マゴチ、ヒラメの16種がある。魚骨が集中的に出土しているのはSE-003であり、他は調査区の全域に点在している。SE-003に集中しているのは水洗選別されているためと考えられる。第3表に同定結果を示した。以下それについて概要を記す。

アオザメは歯が第1層から1点、SE-003から1点出土している。共に歯は長さ3cmを越え大型である。最小個体数は1個体である。

ネズミザメ科は椎骨が包含層、SP-035から各1点出土している。椎骨は径3.5cmと大きい。最小個体数は1個体である。

イタチザメは椎骨が包含層から 8 点、SK - 013 から 2 点、SD - 009 から 2 点が出土している。椎骨は径 2.7 ~ 1.25 cm。最小個体数は 1 個体である。

エイ類は SE - 003 から椎骨 1 点が出土している。径 0.82 cm。最小個体数は 1 個体である。

マグロは SF - 076 から椎骨 1 点が出土している。径 4.1 cm と大きい。最小個体数は 1 個体である。

ブリは SD - 008 から椎骨 1 点、SD - 009 から前上頸骨 1 点、角骨 1 点、SD - 010 から角骨 1 点、SD - 011 から椎骨 1 点、SE - 003 から椎骨 8 点、主上頸骨 1 点、角骨 5 点、SK - 038 から主上頸骨 1 点、第 1 層から主上頸骨 1 点の計 21 点が出土している。最小個体数は 4 個体である。

マアジは SE - 003 から椎骨 13 点、主上頸骨 2 点、歯骨 3 点、稜鱗 10 点の計 30 点が出土している。最小個体数は 2 個体である。

ヤイトハタは SD - 009 から前上頸骨 1 点、SE - 003 主上頸骨 1 点の計 2 点が出土している。最小個体数は 1 個体である。

第3表 博多 161 次調査区出土魚類同定結果一覧表

	前頸骨	上後頸骨	口蓋骨	主上頸骨	前上頸骨	歯骨	角骨	方骨	舌咽骨	鰓蓋骨	上顎骨	椎骨	耳骨	小計	計
アオザメ														2	2
ネズミザメ														2	2
イタチザメ														12	12
エイ														1	1
マグロ														1	1
ブリ	L							4						4	
	R					3	1	3						7	
	?													10	10
														21	
マアジ	L				1		1							3	
	R				1		2							4	
	?												(種類)①	13	23
ヤイトハタ	L				1	1								2	
	R													0	
	?													0	2
コショウダイ	L				1						1	1		3	
	R													1	
	?													0	4
ヘダイ	L													0	
	R					1								1	
	?													0	1
マダイ	L (7)	4	10	13	10	3	5		1	4		3		60	
	R (6)	5	9	8	13	5	5		4	3		3		59	
	?	5	7						6	21		2	3	83	127
カワハギ	L													0	
	R													0	
	?													2	2
フグ類	L				2	3	1	1						7	
	R				4	4								8	
	?													9	24
カサゴ科	L				1	2		1						4	
	R				2									2	
	?													0	6
マゴチ	L									2				2	
	R													0	
	?													6	6
ヒラメ	L													0	
	R													0	
	?													3	3
計	18	7	9	28	33	35	16	13	6	31	8	2	17	142	365

コショウダイは SD - 010 から主鰓蓋骨 1 点、SF - 076 から前上頸骨 1 点、SE - 003 から前鰓蓋骨 1 点、包含層から方骨 1 点の計 4 点が出土している。最小個体数は 1 個体である。

ヘダイは SE - 004 から前上頸骨 1 点が出土している。最小個体数は 1 個体である。

マダイは SE - 003 から前頭骨 15 点、上後頭骨 6 点、口蓋骨 9 点、主上顎骨 11 点、前上顎骨 13 点、歯骨 6 点、角骨 4 点、方骨 9 点、舌顎骨 6 点、前鰓蓋骨 23 点、主鰓蓋骨 5 点、擬鎖骨 2 点、肩甲骨 6 点、椎骨 62 点、SD - 008 から歯骨 1 点、SD - 009 から前上顎骨 1 点、角骨 1 点、SD - 010 から前上顎骨 1 点、歯骨 2 点、SD - 010 - 011 から主上顎骨 1 点、歯骨 1 点、SD - 011 から主上顎骨 1 点、前上顎骨 1 点、椎骨 1 点、SK - 038 から上後頭骨 1 点、主上顎骨 1 点、歯骨 2 点、角骨 1 点、方骨 1 点、主鰓蓋骨 1 点、SP - 042 から歯骨 1 点、SP - 062 から歯骨 1 点、SK - 074 から歯骨 2 点、肩甲骨 2 点、SF - 076 から主上顎骨 2 点、歯骨 1 点、SP - 084 から前上顎骨 1 点、SK - 90 から前頭骨 1 点、歯骨 1 点、第 1 層から前頭骨 2 点、主上顎骨 1 点、前上顎骨 4 点、歯骨 3 点、角骨 2 点、包含層から主上顎骨 2 点、前上顎骨 1 点、歯骨 2 点、前鰓蓋骨 3 点、主鰓蓋骨 1 点、椎骨 20 点の計 246 点が出土している。魚骨の大部分を占めている。大型のものが多く、前上顎骨から割り出した体長は 30 ~ 70 cm が主体である。最小個体数は 13 個体である。

カワハギは SE - 003 から椎骨 2 点が出土している。最小個体数は 1 個体である。

フグ類は SE - 003 より歯骨 1 点、角骨 1 点、椎骨 9 点、SD - 008 から前上顎骨 1 点、歯骨 1 点、SK - 038 から歯骨 1 点、SF - 076 から前上顎骨 1 点、歯骨 1 点、SK - 090 前上顎骨 1 点、SK - 092 から歯骨 1 点、包含層から前上顎骨 3 点、歯骨 2 点の計 24 点が出土している。いずれも骨は大きく、大型のフグであったと思われる。最小個体数は 4 個体である。

カサゴ科は SE - 003 から主上顎骨 3 点、前鰓蓋骨 2 点、SF - 076 から方骨 1 点の計 6 点が出土している。最小個体数は 2 個体である。

マゴチは SE - 003 から前鰓蓋骨 1 点、椎骨 6 点、第 1 層から前鰓蓋骨 1 点の計 8 点が出土している。最小個体数は 2 個体である。

ヒラメは SE - 003 から椎骨が 3 点出土している。最小個体数は 1 個体である。

3. 蜥虫類

爬虫類はカメ類が若干認められる。スッポンは Tr - 2 から上腹骨板 1 点、中腹骨板 2 点が出土している。この他、陸ガメの縁骨板 1 点がある。

4. 鳥類

鳥類は総数 27 点が出土している。このうち同定できたのはニワトリ、キジ、マガノ、コハクチョウ、カモメ類の一種の 5 種である。それぞれの概要を記す。

ニワトリは西側のテストピットから左上腕骨 1 点。この骨の遠位の関節部に切断痕が見られる。SK - 107 から左尺骨 1 点、1 層から右頭足根骨 1 点、左足根中足骨 1 点の計 4 点が出土している。最小個体数は 1 個体である。

キジは Tr - 2・中一下層から左尺骨 1 点、SK - 038・下層から左大腿骨 1 点、SD - 011 から左大腿骨 1 点、SR - 076・上層から右大腿骨 1 点、SK - 038・下層から左頭足根骨 1 点、包含層から左頭足根骨 1 点、第 1 層から右足根中足骨 1 点の計 7 点が出土している。最小個体数は 2 個体である。

その他、包含層からマガノ右上腕骨 1 点、第 1 層からコハクチョウの左手根中手骨 1 点、SK - 038・SF - 076 からカモメの一種の左右足根中足骨各 1 点が出土している。

同定できた鳥類の点数は計 15 点で、哺乳類や魚類に比較するとその量は極めて少ない。

5. 哺乳類

哺乳類の遺存体は極めて多い。241点が同定できた。調査区から出土した哺乳類はニホンジカ、イノシシ、イヌ、タヌキ、ウサギ、ウマ、ウシの7種である。同定したそれぞれの部位について第4表に示した。それぞれについて概要を記す。

ニホンジカの骨で同定できたのは角、下頸骨、遊離歯、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨、距骨、踵骨、中手骨、中足骨、基節骨、中節骨、末節骨等、計126点がある。最小個体数は8個体である。

第4表 哺乳類同定結果一覧表

	ニホンジカ			イノシシ類			イヌ			タヌキ			ウサギ			ウマ			ウシ				
	L	R	?	L	R	?	L	R	?	L	R	?	L	R	?	L	R	?	L	R	?		
角			11																				
頭蓋骨				1	1	1	2	2										1			1		
下顎骨	4	3		1	1		4	4		1	1		1							1			
遊離歯				2			6												5			4	
環椎							1		1														
軸椎																							
頸椎																							
胸椎																							
腰椎																							
骨盤骨							1																
胸骨																							
肋骨							5	1															
頭骨	5	5					2	2										1	1				
上顎骨	1	8		2	2		2	4										1	1				
恰骨	7	2			1		2											1					
尺骨	2	1		1	2		2																
貯骨				1														1		1			
大顎骨	3	5		2			1	2								2		1					
頭蓋骨																							
鎖骨	9	5		2	2		1	1			1							1					
脛骨							1											1					
半脛骨																							
跖骨	2	5																					
蹠骨	3	5		3	2													1		1			
足根骨																							
中手骨	2	6	1																				
中足骨	4		4	4	1															1			
基節骨	5	5		2														1					
中節骨	4	1		2																			
末節骨	2	1																1					
計	53	55	18	21	12	8	22	19	0	1	2	0	1	2	0	8	5	5	2	2	5		

イノシシ類は頭蓋骨、遊離歯、環椎、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、脛骨、中足骨、基節骨、中節骨、末節骨等、計41点がある。最小個体数は2個体である。

イヌは頭蓋骨、下頸骨、環椎、脊椎骨、肋骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨、距骨、踵骨等、計41点がある。最小個体数は4個体であるが、個体識別をすると少なくとも6個体がある。

タヌキは下頸骨、脛骨の計3点がある。最小個体数は1個体である。

ウサギは下頸骨、大腿骨の計3点がある。最小個体数は1個体である。

ウマは頭蓋骨、遊離歯、肩甲骨、上腕骨、橈骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、基節骨、中節骨等、計18点が出土している。最小個体数は1個体である。

ウシは後頭骨、下頸骨、遊離歯、寛骨、脛骨、中足骨の計9点がある。最小個体数は1個体である。

以上の哺乳類の獸骨は、頭部、四肢骨が主体を占め、頸椎、胸椎、腰椎、などの、いわゆる椎骨が極めて少ない共通した傾向を示している。このことは解体が別の場所で行なわれ、遺跡には解体後、四肢が肉類として持ち込まれた可能性を示している。また、ニホンジカの角や中手骨、中足骨は骨角器の材料として使用されている。

6. 海生哺乳類

海生哺乳類と考えられる骨は 4627g が出土している。イルカ類とゴンドウクジラ類がある。イルカ類は SD - 009 から下顎骨 1 点、SE - 004、SD - 009、SF - 076、包含層から 22 点、SD - 010、SK - 038、SK - 090 や包含層から歯が出土している。バンドウクジラ類は包含層から下顎骨 1 点、椎骨 5 点、歯が出土している。共に最小個体数は 1 個体である。

7. 昆虫類

昆虫類は SX - 038 の水洗選別によって検出されたものである。ハエ類の蛹の殻が相当数出土している。形態から 2 種がある。また、ゾウムシ科の蛹と考えられる資料もあるがその数は少ない。

8. 植物遺体

植物遺体は SK - 038 の土壤の水洗選別において検出された種子類と調査区の発掘によって取り上げられたものがあるがその量は少ない。同定できた種子には穀類と雑草の種子、果実の種がある。モモが多いのが特徴的である。以下、種名を列挙する。

オオムギ、アサ、マメ類、アワ、ウリの一種、コムギ、イネ、サンショウ、ソバ、ミゾソバ、ナス科の一種、モモ、ウメ、ドングリ

9. 骨角器

Fig1-1 は鹿角の骨角器素材である。第1枝の上部を鋸で切断、さらに第2枝の分岐点の上端で切断、さらに第2枝も切り落として、その間の材を骨角器の素材としている。角の一面にはわずかに削りを入れている。利用は上端部から始められ、図の縦方向に 2 条、それに直行する 2 条の鋸目が入れられ、枝側から小さな柱状の素材が切り出されている。長さ 17.9 cm、最大幅 3.5 cm、重量 119g、SF-076 出土。2 ~ 4 も鹿角の骨角器素材と考えられるものである。2 は全体にやや摩滅している。鹿角の分岐部が鋸で切断され、枝の先端と主軸部は切断の切込みをいれ折り取られている。枝にはわずかに研磨痕が見られる。長さ 7.1 cm、幅 4.1 cm、重量 26g。SD - 008 出土。3 は枝別れする分岐部分、主軸、枝の部分は鋸で切断されている。表面は部分的に削り痕が見られる。長さ 4.1 cm、最大幅 4.5 cm、厚さ 1.7 cm、重量 20g。SK - 038 出土。4 は枝の分岐部と先端を鋸で切断している。長さ 3.5 cm、最大幅 3.3 cm、厚さ 1.4 cm、重量 8g。包含層出土。5 ~ 9 は鹿角の先端部でいずれも鋸で切り落とされている。5 は長さ 3.8 cm、最大幅 1.3 cm、重量 4g。第1層出土。6 は先端側面に傷が多い。長さ 7.5 cm、最大幅 1.1 cm、厚さ 1.2 cm、重量 7g。包含層出土。7 は中位に削りが加えられ断面形は多角形をなす。長さ 5.5 cm、最大幅 1.0 cm、厚さ 1.0 cm、重量 3g。第1層出土。8 は枝角を切断したものであるが全体に摩滅していく。詳細は不明。長さ 5.8 cm、径 1.0 cm、重量 5.5g。第1層出土。9 は鋸で真横に切断されている。鋸目のあとが明瞭である。鹿角の先端部から側面にかけて傷が顕著であるが、生前にいたか死後にいたかは明らかにできない。長さ 7.5 cm、最大径 1.2 cm、重量 7g。包含層出土。10 は大型獣の骨製品である。全形は上部が広がる楔形をなすが上部を欠損している。片面は骨の表面をうまく

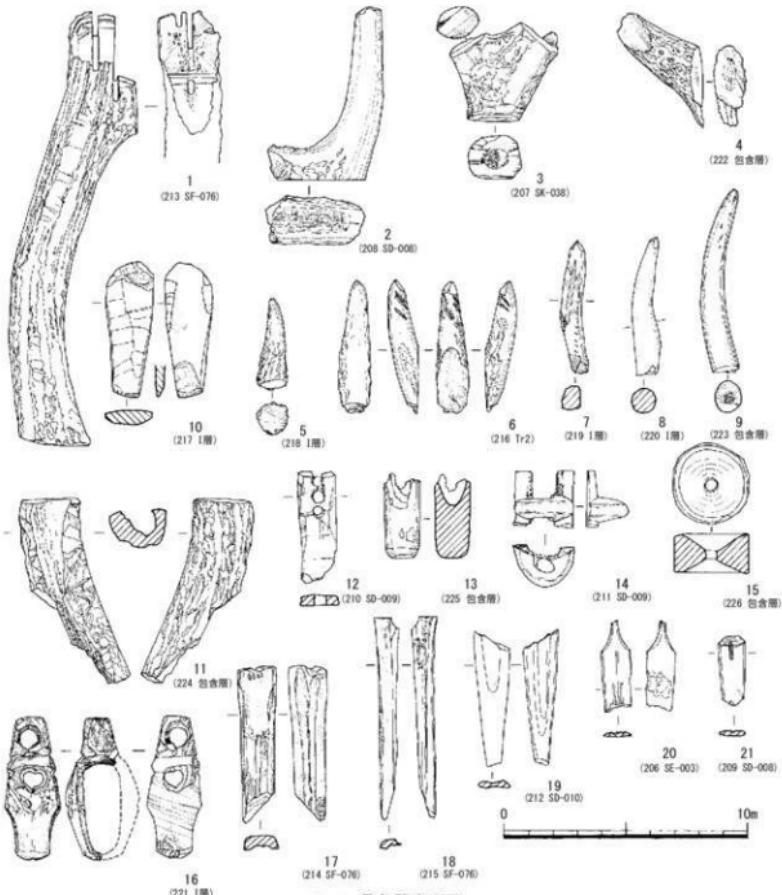


Fig.1 骨角器実測図

利用し加工を加えていないが、裏面と側面は鑿状の工具で削りが加えられている。刃部はやや狭くなり表面から強い研磨が、裏面に軽い研磨が加えられ刃部を形成している。刃部はいわゆる片寄り刃をなす。刃部は使用により光沢がある。骨斧あるいはヘラとしての使用が考えられる。現存長 5.6 cm、幅 1.1 ~ 1.9 cm、厚さ 0.4 ~ 0.6 cm、重量 6.7g。第 1 層出土。11 は鹿角の基部に近い主軸部を利用

した未成品である。両端部は鋸で切断されている。一部新しい欠損部があり全体形は明らかにできない。図の下端部には彫刻刀による抉りが入れられているが一方が失われている。図上半部の一側面は削りが入れられ平坦にされているが、加工が骨軸部まで達していて開口している。加工が粗いため未成品と考えられるが、何の未成品であるかは不明。長さ 7.6 cm、幅 2.5 cm、厚さは平坦部で 1.6 cm、重量 19g。包含層出土。12 は鰐骨製品。長方形の板状に仕上げたものであるが、両端部は一部欠損し、成形はやや粗い。図の上半部に片寄って 3 個の孔が穿たれているが、上の 2 個は破損して連結している。孔の径はそれぞれ異なり、上から 0.4 cm, 0.5 cm, 0.35 cm である。何に使用されたか不明。長さ 4.6 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.5 cm、重量 4.9g。SD - 009 出土。13 は鹿角を使用した製品である。表面を丁寧に研磨して円柱状に仕上げ、中を抉り鞘状にしたものである。上部を欠損する。長さ 3.5 cm、径 1.5 cm、重量 7.3g。包含層出土。14 は鹿角を利用した製品である。方形の板に半円状の把手を作り出し、下端に緊縛をより確かなものにする狭い隆起部を作り出している。全体によく研磨され把手部分に黒色の顔料が付着している。容器類の把手部品として作られたものである。長さ 2.3 cm、幅 2.5 cm、把手部分の張り出しが 1.7 cm、重量 3.3g。SD - 009 出土。15 はネズミザメ科の椎骨に穿孔した製品である。径 2.2 ~ 2.4 cm、高さ 1.6 cm、孔径 0.5 cm、重量 10g。包含層出土。16 は鹿角を利用した刀装具である。全体に良く研磨されているが一部に鹿角の表面が残っている。体部上位にハート形の透かしが入れられている。把手は上部がやや小さくなる立方体で径 0.7 cm の孔が穿孔されている。長さ 5.9 cm、重量 8.6g。第 1 層出土。17 ~ 21 は笄の製品と未成品である。17 は鹿の中足骨を素材とした未成品である。近位関節部を取り込んで縦に割り、板状に仕上げているが、下を欠損している。全体に粗い研磨を加えている。長さ 6.4 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.6 cm、重量 6.9g。SF - 076 上層出土。18 は鹿の中足骨を素材としている。全体に丁寧に研磨が施され光沢を持っている。中足骨の溝の部分で割れ、先端部も欠損している。長さ 8.4 cm 幅 1.1 cm 厚さ 0.4 cm、重量 2.5g。SF - 076 出土。19 は全体に良く研磨されている。両端部を欠損している。長さ 5.6 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.3 cm、重量 2.8g。SD - 010 出土。20 は笄の頭部破片である。両側から抉りをいれている。片面に 3 条の沈線を入れる。全体に丁寧な研磨を施しているが、やや保存状態が悪い。長さ 3.8 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.2 cm、重量 0.8g。SE - 003 出土。21 は両端部を欠損する。全体に丁寧な研磨が施され、光沢がある。片面の中央部に縦方向の沈線 1 条が施されている。長さ 2.9 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.2 cm、重量 1g。SD - 008 出土。これら骨角器や未成品の他に切断痕や解体痕を持つ獸骨が多数ある。

10.まとめ

博多 161 次調査区から出土した自然遺物と骨角器について概観した。ここで若干のまとめをしておく。自然遺物には貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類、海生哺乳類の貝殻・骨、植物、昆虫類の遺存体がある。このうち、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類、海生哺乳類は食料として遺跡内に持ち込まれたものである。いずれの骨格にも解体痕が見られることは、これらが食料であったことを如実に示している。特に哺乳類の骨格が目立つ。イヌは子犬 3 体が含まれ、これらにも解体痕がみられる。他の動物と共に食料とされたことは疑いないが、注目される。植物遺体にもイネ、オオムギ、アワ、ソバ、ウリ、モモ、ウメなど穀類や果物が含まれている。

骨角器は素材、未成品、製品が含まれていて、この場所で製作が行なわれていたと考えることができる。

整理、同定作業では奈良崎和典氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

博多遺跡群 161 次調査で出土したガラス資料と 156 次調査出土の權について

比佐陽一郎（福岡市文化財整備課）

1. はじめに

博多 161 次で出土したガラス製品について、材質や製作技法に関する調査を行ったので、その結果を記す。また、156 次調査は一昨年、すでに報告書が刊行されているが、出土資料の中に金属製の權が含まれていたものの報告書に掲載することができなかつたので、その資料紹介も行う。

2. ガラスおよびその調査の歴史

日本においてガラスは、弥生時代に半島や大陸から、装身具や宝器などとしてもたらされた。石と同等、あるいは代替品として扱われていたものと考えられる。加熱、溶融を伴う製品の再加工は比較的早い時期から行われていたようで、いわゆる『魏志倭人伝』に記された奴国と目される領域の遺跡からは、須玖五反田、井尻 B、比恵といった地点で、弥生時代に遡る鋳型や加工具などの資料が発見されている（吉田 1994・横山 2007・荒牧 2005）。ただし、小玉を中心とする量産される資料は、一部を除き、完成品がまとまって持ち込まれたものであろう。日本国内で原材料からガラスの製造が行われるようになったのは、文献や出土資料、科学分析の結果などを総合すると、飛鳥一奈良時代と考えられるが、北部九州では弥生時代の資料以降、加工も含めてガラス生産に関する痕跡は今のところ発見されておらず、その詳細は明らかでない。

近年、出土遺物に対する考古科学的な分析調査が進み、特にガラスについては肥塚隆保氏による調査研究で、時代や地域ごとの流通、変遷の過程が明らかにされている（肥塚 2003・奈文研 2006）。それによれば、弥生→古代の出土ガラスは大きくアルカリ系ガラスと鉛系ガラスに区分され、前者はカリガラスとソーダ石灰ガラス、後者は鉛ガラスと鉛バリウムガラスに分類される。ソーダ石灰ガラスは更に、アルミニウムの含有量が多いものと少ないものに細分される。カリガラスは中国を始源とし、弥生時代の当初から古墳時代の前半を中心に盛行、その後衰退する。ソーダ石灰ガラスは流通のピークがやや遅れ、弥生時代の後期以降、古墳時代全般にわたって見られる。高アルミナタイプは色調が、赤、オレンジ、黄色、黄緑などカラフルな特徴があり、これらは東南アジアが出自とされる。一方、低アルミナタイプは青紺色を中心とする色調が多いが、含まれるマンガンやマグネシウムの量の多少で大きく二分され、西アジア、中国という原産地の違いが想定されている。鉛ガラスは弥生時代に若干流通するがその後影を潜め、古墳時代の後期以降、再び姿を現す。特に飛鳥時代以降の資料は、鉛同位対比分析により朝鮮半島や日本国内での製造が想定されている。鉛バリウムガラスは、中国の戦国→漢代に盛行する種類のガラスで、日本でも漢の影響を多分に受けた時代、地域に多く見られる資料となっている。

成分の違いは溶解温度、更には加工法にも影響するようで、小玉類に限ればアルカリ系ガラスの多くは引伸ばしてガラス管を作った後、細分して再加熱する製作技法が（小瀬 1987）、また鉛系ガラスは何らかの芯材に巻き付ける技法が多く用いられている。筆者もこれまで、当該時期の福岡市内出土資料を中心にガラス製品の調査を進めてきたが、その結果は、肥塚氏らの研究を大きく逸脱するものではない。

弥生→古墳時代に関しては、近年、各地で委託業者も含めた分析調査の事例が増加しつつある。しかし、それ以後の時代になると、資料が限られることもあり、肥塚氏の研究以外にそれほど多くの分

析事例は見られないようである。しかし、博多遺跡群では大規模な都市生活の痕跡が埋まっていることで、出土遺物の量は市内の他遺跡に比して桁違いである。の中にはガラス製品も多く含まれており、肥塚氏らの調査対象になってきたほか（山崎ほか1993・1995・1996）、福岡市の埋蔵文化財センターに分析装置が導入されて以後、発掘調査報告書の作成に伴い分析等の調査が行われてきた。それによれば、古代末以降、それまでにない種類のガラスが登場する。これはカリウム鉛ガラスという種類で、中国宋代が起源とされるクリスタルガラスの一種である。博多遺跡群で出土するガラスを分析すると、かなり高い割合でこの種のガラスに同定され、また博多以外でも古代末の土壙墓や近世墓の副葬品でも確認しており（比佐ほか2003・比佐2004）、幅広い時代に盛行していた状況が窺える。

ただし、博多に限ったことではないが、遺跡では古来、人々の生活が連続と続いている、あらゆる時代の資料が地下に埋没している。通常、攪乱がない限りは層位的に堆積し、前後関係を知ることができるが、特にガラス小玉のような小さな資料は、墓地への副葬など明確に遺構に伴う状況が確認できない限り、僅かな外的要因によって本来と異なる時代の層位や遺構に紛れ込む危険をはらむ。結果的に、数多く出土するガラス資料で、明確に時期認定できる資料は極めて限られることになる。その様な場合、分析結果を基にして（もちろん考古学的属性も加味した上で）、ガラスの種類から資料の時代を大掴みすることが可能となる。

3. 博多遺跡群出土のガラス

現在、博多遺跡群では200箇所を越える地点が発掘調査されているが、埋蔵文化財センターに何らかの形で収蔵されている資料や報告書に掲載されたガラス製品を2007年度当初で集計したところでは、その数は850点近くにのぼる。市内全域では約9,000点が出土しているので、1割が博多で出土していることになる。多くは、遺跡が交易都市として栄えた12世紀以降のものと思われるが、遺跡群南側の博多浜と呼ばれる砂丘城では、弥生時代の甕棺墓や古墳時代の集落、墳墓も多数確認されていて、後世の破壊により副葬品が散在したものも含まれている可能性も考えられる。850点の中の限られた資料ではあるが、過去、埋蔵文化財センターで分析を行った博多出土のガラス製品のデータは、概ね次のように区分される。

I. 弥生-古墳時代に見られる種類のガラス

時折、カリガラスやソーダ石灰ガラスが確認される。カリガラスはその名の通りカリウムが非常に特徴的に表れる。ソーダ石灰ガラスではナトリウムやカルシウムの検出がポイントとなるが、ナトリウムは風化で失われやすく、検出されない場合もある。地下鉄工事に伴う祇園町工区の発掘調査では（池崎1988）、古墳中期の墳墓と見られる土壙SK-14から副葬品として石製玉類とともに出土した小玉が、23点いずれもソーダ石灰ガラスであった¹⁰¹。また同じ祇園町の147次調査では、古墳前期の遺物が出土する4面出土のガラスにカリガラスがある（大塚2006）。

II. カリウム鉛ガラス

過去分析調査を行った中では最も数が多い。珪素の他に強い鉛のピークと、カリウムが検出されることで判断する。青色の資料は銅で着色されたと考えられる。鉄が多く含まれると緑色が強くなるようである。時折カルシウムが強く表れ、カリウムを上回る高さのものが見受けられるが、この特徴は風化して白っぽくなつた資料が多く、科学的な裏付けはないものの風化に伴う挙動と想定している。

博多ではガラスの加工に用いられた坩堝が多数出土しており（比佐2008）、付着残存しているガラスの分析を行ったものは、いずれもカリウム鉛ガラスであることから、この種のガラス製品の幾つかは、博多の地で作られたものと考えられる。坩堝の分布を見ると、「博多浜」の御供所町西端、冷泉

町と店屋町の境界付近、祇園町中央部の3カ所、集中する地点が認められるが、明確な遺構は発見されておらず工房の詳細は不明である。この坩堝は数が多いものの、形態的なバリエーションは非常に限られている上、共伴遺物で見た場合、その時期は12世紀に集中している。一方で、博多遺跡群以外でも、周辺の箱崎や吉塚祝町といった遺跡や、やや離れた大宰府でも出土しており、決して博多限定のものではない。どの様な背景で偏った時期に同じ様な坩堝が、博多とその周辺で使われたのかという疑問を解決する手掛かりは今のところ得られていない。また、坩堝の時期は限定されても、ガラス製品そのものは、その前後の時代も連続と存在する。他の時代にどの様な器物を用いて加工されていたのか、技術の系譜を含め、今後注視すべき課題である。

III. カリ石灰ガラス？

上記二種とは別に、分析結果を一見するとカリガラスとよく似たチャートを示す資料が、決して数は多くないものの時折見受けられる。ただ、弥生時代に見られるカリガラスと違うのは、何より資料の形状で、容器片や帶飾り、用途や使用部位は不明ながらも丸棒や複雑な形状の装飾品と見られるものの破片など、弥生や古墳時代には見られない特異なものばかりである。また分析チャートを詳細に見ると、弥生時代のカリガラスのものと比べ、カルシウムがより明確に表れている。またアルミニウムも同様の傾向を示す。一部ではナトリウムが僅かながら検出されるものもある。

これらは江戸時代のガラスとされるカリ石灰ガラスの可能性が考えられる（肥塚1999）。博多遺跡群の資料では、出土遺構あるいは層位の詳細な検討はしていないものの、中世など、より古い時代に遡るかもしれない。何より、この種のガラスについては、筆者がまだ詳細を把握しておらず、検討の俎上に載せるにはまだ不十分な段階である。これも今後の課題として、提示するに止める。

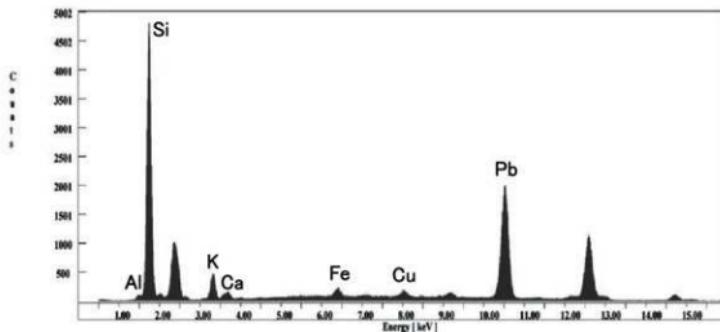
4. 161次調査出土のガラス。

本題からはずれたところで紙幅を費やすてきたが、ここでようやく博多161次出土ガラスについて見ていきたい。本調査では14点のガラス資料が確認されている。その内容は一覧表に示すとおりである。

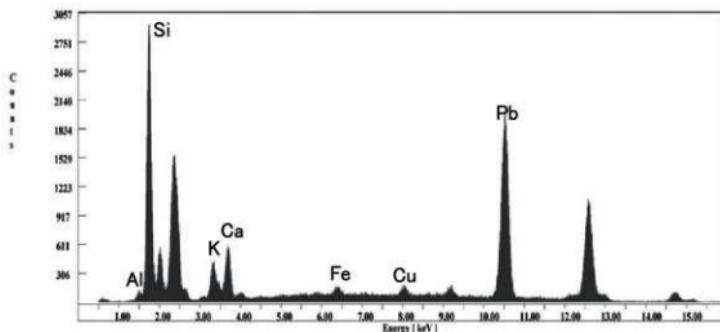
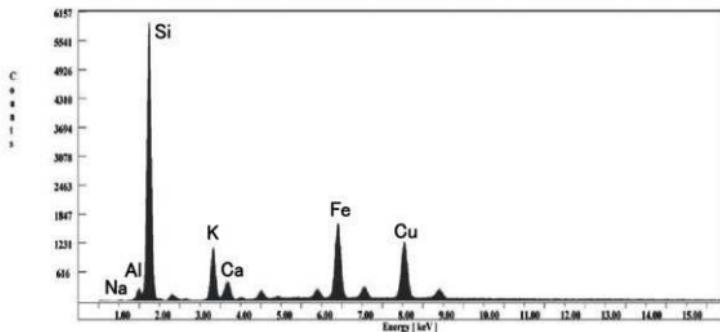
出土遺構	資料名	色調	細胞状況	製作手法	分析結果	区分
1 古墳層	小玉	青緑	透明 気泡有 巻き付け	透明 気泡有 巻き付け	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, K, Ca, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
2 古墳層	小玉	淡青緑（氯化物）	半透明 褐色のため色が当たってくすみ青緑は透明白に凸凹している。 製作手法を確認するには半透明の色が目立つ。	半透明 褐色	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, K, Ca, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
3 古墳層	小玉	青緑	透明 気泡有 巻き付け多く含むもののみ認められない。 製作手法を確認するには半透明の色が目立つ。	半透明 褐色	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
4 SP-014	小玉	緑	透明 褐色のないもの認められないのみにいく。 透明や帯飾り付けたことを示している。 Mn ₂ O ₃ を含む。	巻き付け	○SiO ₂ , Mn, △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
5 SP-014	小玉（破損）	緑	透明 褐色のないもの認められないのみにいく。 透明や帯飾り付けたことを示している。 Mn ₂ O ₃ を含む。	巻き付け	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
6 SP-014	小玉（破損）	緑	透明 褐色のないもの認められないのみにいく。 透明や帯飾り付けたことを示している。 Mn ₂ O ₃ を含む。	巻き付け	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
7 SK-002	小玉	淡青	不透明 褐色のため色が当たってくすみ青緑は透明白に凸凹している。 製作手法を確認するには半透明の色が目立つ。	半透明 褐色	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
8 SK-107	小玉	青	半透明 褐色のため色が当たってくすみ青緑は透明白に凸凹している。 製作手法を確認するには半透明の色が目立つ。	半透明 褐色	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, Fe, ×Mn, Cu	カリウム酸ガラス
9 第2層	小玉	淡青緑	半透明 褐色のものは不透明ながら、透明そのものが巻き付けた状況を示す。	巻き付け	○SiO ₂ , Mn, △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
10 SK-101	小玉	青	半透明 透明や塊状が沢山そって縦横状に混れる。小部分に突出有り。	巻き付け	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
11 古墳層	小玉	青	半透明 製作手法を示す乳化等の流れは認められない。丸の大きさにて、平張 半張	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, ×Mn, Fe, Cu	カリウム酸ガラス	
12 第1層	本瓶(?)（道玉状）	青	不透明 透明の丸の大きさで差異なし。形状の大きなのが巻き付けた状況を示す。 外側細部が剥がれられた状況を示す。	巻き付け	○SiO ₂ , Mn, □Al ₂ O ₃ , △MgO, K, Fe, Cu	カリウム酸ガラス
13 古墳層	本瓶(?)（不定形物）	淡青	不透明で形状、細い瓶の外の有物が溶解して流れます。本瓶	——	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , △MgO, Ca, Cu, ×Mn, Fe	カリウム酸ガラス
14 SE-004	細片一括	青	透明 多くの網状に崩壊し、縦・横・斜めに亀裂がある。透明白感極めて強く 表面に剥がれられるが剥れ込みれない。剥離した部分が少なく、主 要是はほとんどなくなり。裂離などにあたる部分が貴重らしくある。	半透明 褐色	○SiO ₂ , □Al ₂ O ₃ , Fe, Cu, △MgO, K, Ca, ×Mn, Fe	カリウム酸ガラス?

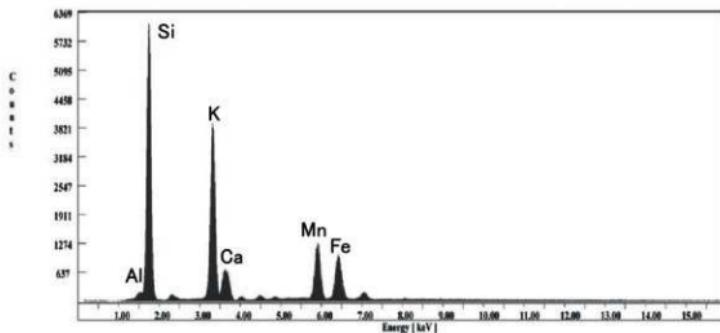
博多161次出土ガラス一覧

○: 増加に強いマーク □: 増加しないもの△: 増加しないもののうち、Mn₂O₃認められるがそれほど強くないもの×: 無効なもの

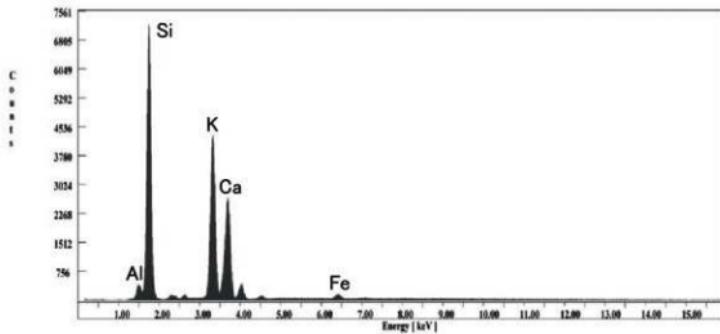


No.3 カリウム鉛ガラス

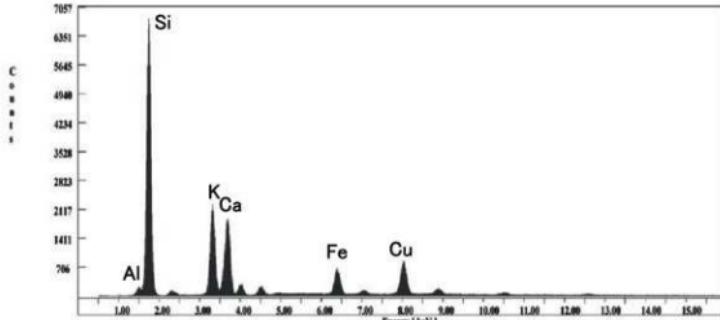
No.7 カリウム鉛ガラス(やや風化?)
カルシウムのピークが高く現れているNo.14 カリ石灰?ガラス
博多161次出土ガラスの蛍光X線分析結果



147次調査出土青紺色小玉(042620005) カリガラス



80次調査出土乳白色帶飾り(930930007) カリ石灰?ガラス

95次調査出土青色棒状品(955430002) カリ石灰?ガラス
博多遺跡群出土ガラスの蛍光X線分析結果

透明感や色の濃淡に多少の違いはあるものの、全て青色である。顕微鏡などで気泡の流れや、ガラスの流れが風化で顕わになった触像などを見ると、流れの読めない資料も幾つかあるものの、玉類の多くは何らかの芯材に巻き付けて作られた製作技法と考えられる。

蛍光X線分析による材質調査では、1~13は検出されるピークの高低に違いは見られるが、概ね珪素が最も強く、次いで鉛、そしてカリウムが認められることから、カリウム鉛ガラスと考えられる。他にカルシウムや鉄、銅も検出される。資料によってはカルシウムがカリウムのピークを上回るようなものもあるが、これも風化の影響と考えられる。

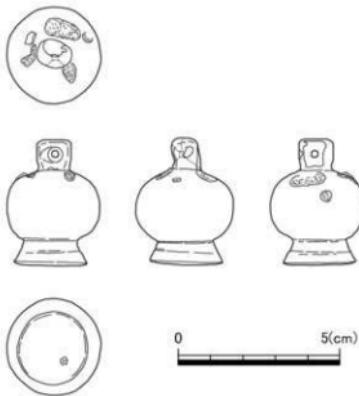
14のみは鉛が全く検出されておらず、比較的カリウムが強く、カルシウムも検出されていることなどから、IIIとしたカリ石灰ガラスと見られる一群に属すると考えられる。この資料はバラバラに碎け、残った細片にも亀裂が多く入っている。観察や分析からみれば、いずれの細片も同一固体のものと考えられるが、本来どの様な器物であったかを知る手掛かりは極めて限られる。少なくとも大きな曲面や孔の痕跡などではなく、玉類ではなかったであろう。どちらかといえば板状のようにも思えるが、明確な根拠はない。

今回、1点の例外はあったものの、やはりカリウム鉛ガラスの優位性が確認された。また直接的な加工用具の出土は見られないが、未製品と思しきものも含まれていた。本調査地点はガラス坩堝の集中出土地点の一つである冷泉町・店屋町境界部分（125次調査地点周辺）から北東に100mほどの地点に当たり、そことの関連も考えられるかもしれない。今後もより多くのガラス製品やその関連資料の調査を進め、都市におけるものづくりや流通の実態に少しでも迫っていきたい。

5. 156次調査出土の権について

権とは秤の錘のことで、秤の棹を示す衡と合わせて権衡という言葉が知られている。遺跡から出土する権衡資料については、宮本佐知子氏による全国的な資料を扱ったものから（宮本1994）、吉村靖徳氏による福岡県内の特に権を対象とした研究（吉村1995）、小畠弘己氏による博多遺跡群出土資料の研究などがある（小畠2008）。これらを基に、156次出土資料について若干の検討を試みる。

156次出土の権は金属製で、全体に緑青に覆われている外觀から、銅合金の鋳造で作られていることは容易に想像がつく。球形の胴部にスカート状の台と、上部には紐を通す孔を有する突起が設けられた形状である。台や鉢と球形の体部との境には、特に段差など形狀的な裝飾は認められない。また鉢は板状の形態であるが、片側が大きく抉れたように回んでいる。総高3.9cm、胴部の最大径は3.0cm、重さは112.3gを計る。この重さは尺貫法では29.9匁一ほぼ3両となる。蛍光X線による材質分析では、検出される元素ピークの強弱が測定部位によって大きく異なるものの、定性的には銅と鉛が主成分となる。一般的な青銅の成分である錫は含まれていない。



博多156次出土権実測図(S=2/3)

資料の属する时代であるが、出土したのは第1面と第2面の间的遺物包含層Ⅰ層である。第1面は13世纪代、第2面は12世纪後半～13世纪の年代が与えられており、層位から見れば12世纪後半から13世纪代の遺物ということになる。

形状から見ると、宮本氏による分類の、錘のB類に該当する。B類は「中国で束腰形と呼ばれている縱長の本体で、途中にくびれ（束腰）部があり、くびれの上は球形で、くびれの下は裾広がりの台状になっている」ものとされている。この種類は時代の幅が非常に広く、8世纪から近世までの資料があるため、単純な比較による検討は難しいが、古代に遡るのは平安京出土の1点のみで、他は中世の資料が大半を占めている。しかし、宮本氏の集成している資料に博多156次のものと同じ形状のものは見いだせない。他で比較的似た形状の資料として挙げられるのは、福岡市南区臼佐3次で出土した滑石製の資料である。材質の相違とともに高さが5.3cm、径が4cmと一回り大きいが、スカート状の台座と球形の胴部というモチーフは共通している。ピットからの出土で、この遺跡のピットは12世纪前半から13世纪後半に属するという報告書の記述通りであれば、博多156次の出土層位の时期とよい一致を示す。福岡市内では博多店屋町博多店屋町工区出土資料がB類であるが、遺構遺構外の出土で周期的な比較資料とはならない。

もう一つ、材質的な部分での検討であるが、今回、市内の類例についての分析は行い得ていない。比較する材料はないものの、大宰府親世音寺の金属製品や法隆寺献納物に対する調査で、古代では銅-錫の青銅であったものが、中世になると鉛の含有量が多くなったり、銅-鉛合金が現れるという研究もあり（加藤2007・村上1994）、それを当てはめるならば、やはり銅-鉛合金である博多156次出土資料も、中世の範疇に入れることに齟齬は来さないことになる。ただし、この資料は権という性格上、鉛の添加なり含有が重さの調節という、用途に起因するものである可能性も否定できない。

最後に、別表に市内出土権衡関係資料の一覧を示す。この中には権とは異なる用途のものが含まれる可能性もあるが、一応掲載しておく。材質は金属製、石製、土製があり、時代も古代から中世に幅広く見られる。重量は完形品だけを見てもばらつきが大きく、傾向やまとまりを見い出すことは困難である。特に石、それも滑石製で博多出土の資料が多い。同時に近年調査件数が急増している箱崎でも類例が増えており、交易活動の頻度に比例しているものと推察される。古代の資料も比較的多いが、これらは大宰府の水城から博多や鴻臚館に延びていたと推定される官道沿いの遺跡や、それ以外では海の中道、元岡といった公的施設と見られる遺跡からの出土である。博多156次の資料は周期的な検討の結果、中世前半期の可能性を強く示すものとなつたが、小畠氏によれば、12～14世纪代の資料は滑石製が主で、金属製の権が無いとされており、時期認定に誤りがなければ本資料はこの时期的の金属製権として貴重な存在ということになる。小畠氏も指摘するように、当該期の博多は中国と盛んに貿易を行っており、当然、重さを量る道具が交易の場で用いられ、中国商人が自らの秤を持ってきていたことも十分に考えられよう。この金属製権がどこからもたらされたのかは、更なる類例の出土を待つて検討すべきではあるが、興味深い課題である。

註)

1. 今回分析を行い確認した。詳細はいずれ改めて別稿を設けたい。

参考文献)

※市内出土権衡資料の出典については、別表に福岡市埋蔵文化財調査報告書の集数を示し、書名等は割愛させていただく。

- 荒牧宏行（編）2005『比恵 40-比恵遺跡群第 87 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 857 集 福岡市教育委員会
- 池崎謙二（編）1988『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 VII 博多-高速鉄道関係調査(4)-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 193 集 福岡市教育委員会
- 大塚紀宜（編）2006『博多 106-博多遺跡群第 147 次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 892 集 福岡市教育委員会
- 小畠弘己 2008「度量衡」『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 加藤和哉 2007「観世音寺境内および子院跡出土銅・銅合金製造物の材質調査」『観世音寺-考察編-』九州歴史資料館
- 肥塚隆保 1999「ガラスの調査研究」『日本の美術 9』No. 400 美術を科学する 至文堂
- 肥塚隆保 2003「日本出土ガラスの考古科学的研究-古代ガラスマテリアルとその歴史的変遷-」『考古科学の総合的研究』平成 10-14 年度科学研究補助金研究成果報告書 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・沢田正昭
- 小瀬康行 1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第 73 卷第 2 号 日本考古學會
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2006『埋蔵文化財ニュース』124
- 比佐陽一郎・片多雅樹 2003「今宿遺跡 3 次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査」『今宿遺跡 2-3 次調査の概要-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 738 集 福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎 2004「下町外烟遺跡第 3 次調査出土ガラス製品について」『下町外烟遺跡・宮野蓮輪遺跡-福岡県朝倉都朝倉町宮野所在遺跡の調査-』福岡県文化財調査報告書第 192 集 福岡県教育委員会
- 比佐陽一郎 2008「ガラス」『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 宮本知子 1994「国内出土の權衡資料」『大阪市文化財論集』財團法人大阪市文化財協会
- 村上隆 1995「法隆寺所蔵金属製容器の調査（科学的調査）」『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所
- 山崎一雄・肥塚隆保 1993「博多第 59 次調査ビット 0018 出土の無釉壺内に付着した緑色ガラスの化学分析」『博多 36-第 59 次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 328 集 福岡市教育委員会
- 山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志 1995「博多遺跡群第 62 次調査で出土した無釉壺破片に付着した緑色ガラスの化学分析値と鉛同位対比」『博多 48-博多遺跡群第 62 次調査の概要-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 397 集 福岡市教育委員会
- 山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志 1996「博多遺跡群第 79 次調査で出土した緑色ガラス容器の化学分析と鉛同位対比測定」『博多 50-博多遺跡群第 79 次調査の概要-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 447 集 福岡市教育委員会
- 横山邦雄（編）2007『井尻 B 遺跡 15 市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書 IV-井尻 B 遺跡第 17 次調査(C・D 区)の報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 918 集 福岡市教育委員会
- 吉田佳広（編）1994『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第 22 集 春日市教育委員会
- 吉村靖徳 1995「權衡に関する一考察-福岡県内出土權状製品の検討と課題-」『九州歴史資料館研究論集』20 九州歴史資料館

施設名	現 名	現 道 路 名	土木構造	資料名(別冊)	支 柱 高 度 m				基準	特性	昭和 年 代	明治 年 代
					左 2	右 2	左 大 2	右 大 2				
1 案山中瀬川	740	10033	平野	右岸(津軽)	51.00	46.00	45.15	50.50	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	67	42-17
2 多々良山川(河原)	7115	10000	第1・2号渠	右岸(津軽)	46.00	47.30	47.45	46.30	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	52	7-22
3 多々良山川(河原)	824	625		左岸(津軽)	25.00	8.00	6.55	11.00	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	121	明治化
4 多々良山川(河原)	824	629		左岸(津軽)	34.55	11.70	18.00	16.50	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	121	明治化
5 多々良山川(河原)	824	631		土・瓦(津)	50.00	47.25	25.00	48.00	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	121	明治化
6 鹿内川(河)	9648	30342	(P-192)	右岸(津軽)	89.45	36.70	29.35	100.52	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	551	PL-54-345
7 鹿内川(河)	9648	30342	(P-192)	土・瓦(津)	86.00	32.50	16.50	91.91	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	551	PL-54-345
8 鹿内川(河)	200108	795	99-188	右岸(津軽)	90.10	36.00	26.20	93.39	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	603	44-17
9 鹿内川(河)	200108	5147	1905鹿内川(河)	右岸(津軽)	58.00	26.45	22.45	116.97	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	549	28-187(等高)
10 鹿内川(河)	200037		鹿内川(河)	全高(津合会)管	31.20	20.00	28.00	71.42	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	1046	49-349
11 鹿内川(河)	200099	105	表御	右岸(津)	45.10	26.35	10.00	49.95	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	952	18-105
12 鹿内川(河)	200099	106	表御	右岸(津)	57.45	32.30	25.20	82.52	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	952	18-106
13 鹿内川(河)	7944	1991	小字號鹿内川(河)	右岸(津)	89.00	19.00	19.00	93.99	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	125	159-1
14 鹿内川(河)	8246	10607	佐賀縣立リガリット	右岸(津)	27.15	29.35	26.50	38.47	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	131	145-1
15 鹿内川(河)	8246	10608	佐賀縣立リガリット	右岸(津)	25.10	36.30	25.80	47.87	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	131	145-2
16 鹿内川(河)	200011	367	〔表〕SP-218	右岸(津)	52.75	40.20	38.00	107.13	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	551	PL-54-347
17 鹿内川(河)	8502	210	大正10-01	右岸(津)	43.35	25.95	10.20	89.82	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	132	18-235
18 鹿内川(河)	9623	1929	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	40.45	16.20	17.00	21.26	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	376	24-115
19 鹿内川(河)	9624	1929	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	32.60	24.25	31.50	91.88	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	328	30-99
20 生駒川(河)	350448	77	SP-010	右岸(津)	79.90	22.30	12.40	81.49	下り水	中世紀末-末(15-16世紀)	884	13-77
21 伊勢佐木町(工事)	7725	2312	工事	右岸(津)	116.00	116.00	116.00	116.00	直角度	中世紀末-末(15-16世紀)	105	10-107
22 伊勢佐木町(工事)	7725	2063	伊勢佐木	右岸(津)	28.00	26.00	24.75	37.50	直角度	中世紀末-末(15-16世紀)	105	10-107
23 伊勢佐木町(工事)	8241	2551	伊勢佐木	右岸(津)	29.00	21.00	05.00	75.99	小字御用に記載あり	18-111(等高)	131	明治化
24 伊勢佐木町(工事)	8257	20601	ビートSP-2414	右岸(津)	28.50	25.25	21.00	52.40	植物による危険	18-111(等高)	135	180-41
25 伊勢佐木町(工事)	8683	20002	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	47.80	26.00	18.15	27.17	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	211	43-4
26 伊勢佐木町(工事)	8684	20008	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	76.20	26.35	28.20	183.98	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	236	23-647
27 伊勢佐木町(工事)	8684	8197	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	66.00	32.70	28.00	104.39	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	236	24-606
28 伊勢佐木町(工事)	8685	8022	伊勢佐木	右岸(津)	36.15	19.90	9.70	37.07	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	236	24-487
29 伊勢佐木町(工事)	8682	8003	1746号橋	右岸(未開会)	62.50	34.75	31.20	104.37	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	245	189-9
30 伊勢佐木町(工事)	8682	402	土・瓦(25)	右岸(津)	45.15	26.75	28.00	80.01	右岸の変化による「丸跡が美しい」	12世紀	226	44-7
31 伊勢佐木町(工事)	8689	8020	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	64.00	47.75	17.40	60.80	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	235	123-666
32 伊勢佐木町(工事)	9593	3044	伊勢佐木(アリヤマ)	右岸(津)	58.85	37.40	26.50	106.70	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	295	13-667
33 伊勢佐木町(工事)	9605	3015	〔表〕大字大字名録(通称)伊勢佐木	右岸(津)	60.00	35.50	7.50	59.99	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	295	PL-29-299
34 伊勢佐木町(工事)	9603	2910	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	42.40	24.85	13.00	37.55	直角度	11世紀	297	445-2
35 伊勢佐木町(工事)	9235	25	〔表〕大字(未開)	土壁	54.45	45.60	20.70	59.18	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	234	22-10
36 伊勢佐木町(工事)	8689	4042	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	50.00	45.00	33.00	153.50	部分的に築堤材	11世紀	447	44-22
37 伊勢佐木町(工事)	9309	801	〔表〕大字大字名録E-7	右岸(津)	42.00	27.40	26.25	49.82	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	448	105-663
38 伊勢佐木町(工事)	9514	40017	伊勢佐木(通称)伊勢佐木	右岸(津)	66.70	29.75	19.95	47.67	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	757	10-1249
39 伊勢佐木町(工事)	9641	20044	〔表〕大字大字名録	右岸(津)	54.30	46.25	12.00	40.71	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	660	78-5
40 伊勢佐木町(工事)	9983	8446	1-7-10(未開)	右岸(津)	30.00	17.00	8.70	26.00	右岸の変化による「丸跡が美しい」	14世紀	706	105-25
41 伊勢佐木町(工事)	200006	2020	SE-021(未開)	右岸(津)	37.60	17.00	16.50	53.23	直角度	11世紀	758	明治化
42 伊勢佐木町(工事)	200138		土壁(未開)	右岸(津)	10.00	10.00	10.00	10.00	直角度	11世紀	764	59-612
43 伊勢佐木町(工事)	200555	1886	1巻	右岸(津)	38.00	29.50	25.50	112.00	直角度	11世紀	945	明治化
44 伊勢佐木町(工事)	9723	1994	1408-1448号通称伊勢佐木上	右岸(津)	74.00	66.00	69.00	971.54	右岸の変化による「丸跡が美しい」	古代	148-1	
45 伊勢佐木町(工事)	8233	217	上・下-04	右岸(津)	38.00	20.40	28.00	45.15	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	216	25-217
46 伊勢佐木町(工事)	9112	43	41200西吉野川	土壁	29.65	27.40	21.20	26.13	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	516	12-63
47 下伊勢佐木町(工事)	200237	865	右岸(津)	41.00	23.00	22.00	36.16	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	796	76-965	
48 伊勢佐木町(工事)	200001	4003	38-19(未開通構造物)	右岸(津)	26.20	25.00	20.70	97.37	直角度(大きな跡れり)	11世紀	962	52-6

矢張地

1 伊勢佐木町(工事)	9195	70194	2号出入口土手界	右岸(津)	100	100	100	100	直角度	11世紀	193	明治化
2 伊勢佐木町(工事)	9554	20254	[表]レーン整理	右岸(津)	100	100	100	100	直角度	11世紀	767	12-1242
3 伊勢佐木町(工事)												
4 伊勢佐木町(工事)	8689	2338	388号橋	右岸(北側)・左側	11.90	17.90	13.45	18.96	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	285	54-319
5 伊勢佐木町(工事)	8689	2327	389号橋	右岸(北側)・左側	25.30	28.40	12.25	22.36	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	285	54-320
6 伊勢佐木町(工事)	8689	2328	388号橋	右岸(北側)・左側	28.40	28.00	15.15	110.77	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	285	54-321
7 伊勢佐木町(工事)	8693	2318	388号橋	右岸(北側)・左側	26.75	23.35	16.30	147.53	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	285	54-322
8 伊勢佐木町(工事)	8693	20002	40-238	右岸(北側)・左側	22.80	15.05	8.70	14.31	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	448	121-664
9 伊勢佐木町(工事)	9055	20122	右岸(津)	33.10	42.30	18.75	17.74	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	388	299-656	
10 伊勢佐木町(工事)	9605	20141	8-11上岸	右岸(津)	22.50	28.00	11.00	26.97	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	598	299-1867
11 伊勢佐木町(工事)	9605	20126	8-11下岸	右岸(津)	14.45	8.70	6.00	3.25	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	598	299-1868
12 伊勢佐木町(工事)	9605	20132	38-19(未開)	右岸(津)	24.00	17.75	6.00	11.09	1-34失火	11世紀	598	15-155
13 伊勢佐木町(工事)	200006	20047	4-20(未開)	右岸(津)	9.40	8.90	2.52	0.44	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	708	PL-121-1170
14 伊勢佐木町(工事)	200388	20001	38-19(未開)	右岸(津)	16.45	15.90	7.85	11.10	右岸の変化による「丸跡が美しい」	11世紀	961	21-260

注) 斜体字は斜めの直角度、粗体字は各方向の直角度
※斜体字の数字は後方地盤文化財調査報告書の数字

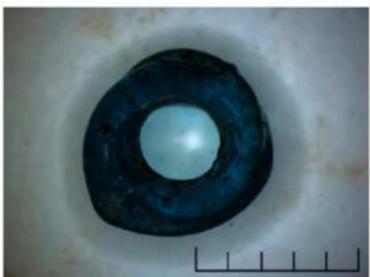
**金属製**

20: 博多店堀町工区 (772902069)
21: 博多35次 (864800017)
22: 博多62次 (895622010)
23: 博多120次 (955298446)
24: 博多35次 (864800021)
25: 博多35次 (864800017)
26: 博多35次 (864800021)
27: 博多35次 (864800021)
28: 博多47次 (902800021)

土製

29: 実原20次 (000140005)
30: 実原20次 (000140005)
31: 実原20次 (000140005)
32: 実原20次 (000140005)

福岡市内出土の權 (S=1/4) ※番号は一覧表に対応、カッコ内は遺物登録番号



博多161次ガラス玉 No.01



博多161次ガラス玉 No.04



博多161次ガラス玉 No.07



博多161次ガラス玉 No.09



博多161次ガラス玉 No.09-側面



博多161次ガラス玉 No.10-側面

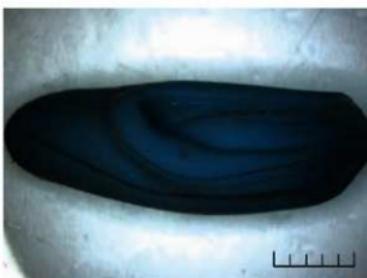


博多161次ガラス玉 No.11-破断面部部分

調査資料の写真図版(ガラス玉写真的スケールは一目盛り1mm)



博多161次ガラス玉 No.12



博多161次ガラス玉 No.13



博多161次ガラス玉 No.14



類例調査資料:博多80次 帯飾り



類品調査資料:博多95次 棒状品



博多156次 金属製権 表裏



博多156次 金属製権 左右両側面



博多156次 金属製権 上面

調査資料の写真図版(ガラス玉写真のスケールは一目盛り1mm)



博多156次 金属製権 鈫部分拡大

報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多126							
副書名	博多遺跡群第161次調査報告							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1038集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2009年3月31日							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
はかた いせきぐん 博多遺跡群 第161次	ふくおかし ひかたく 福岡市博多区 店屋町22番～10	40130	0121	33° 35° 48°	130° 24° 37°	20060317 ～ 20060708	246.5	ビル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
博多遺跡群 第161次	集落 墳墓	中世～近世	土壤 井戸跡 建物跡 鋼冶炉 道路遺構		土器 陶磁器 木器 銅錢 鉄製品 銅製品 石製品 土製品 鰐魚骨 種子		遺構面 2面	

博多 126

—博多遺跡群第161次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1038集

2009年(平成21年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 福博綜合印刷株式会社